
忍者（ふくろう）の学園（しろ）

森実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍者の学園ふくろうしろ

【Nコード】

N7516S

【作者名】

森実

【あらすじ】

お馴染みの時内結じないゆう19さい。

自称唯の大学生が今度はなんと二次元に！！

01 「今夜も星がきれいだ。」

それは突然だった。

*
*
*
*
*
*
*
*
*

私は土井半助。

忍術学園の一年は組の教科担当教師。
身長約175cm、25歳、射手座、O型、瀬戸内の福原出身で火薬委員の顧問している。

普段は忍術学園で暮らしているが、夏休みなどの長期休暇の時は長屋の自分の家に帰っている。

その夏休みも中盤に差し掛かり、今日も私は

うちの居候でありクラスの生徒でもあるきり丸のアルバイトにつき
合あわわさされれへへととへへととだだつつたた。

今日のアルバイトは朝いちからイノシシの散歩で

午前の子守をしながらのアイスキャンディー売り、

そして午後は洗濯と薪割り。

どれも半端ない量で死ぬかと思った・・・。

がんばった私に拍手。

今はその苦勞を自ら勞つて、夕涼みをしながら清酒を少し口に含ませ、星空を見ていた。

きり丸はすでに大の字になって、熟睡していた。

こうやって、寝ているのを見るとやっぱ子どもなんだよな．．。

そして、視線を星空に戻した。

「今夜も星がきれいだ。」

その時だった。

異変が起こったのは。

「ん？」

見ていた星空が歪み、奥がまったく見えない黒い穴が出来上がった。周りの木々はその穴から起こる風によってザワザワと音をたてる。私はとっさにチョークを構えた。

すると、今度はその穴から、発光する何かがゆっくり落ちてきた。胸元に仕込んであるクイナを確認すると上から降ってきているものに走りよった。

降りてきているそれを観察すると布団であり、人が寝ていた。

人はまだ幼さを残した少年で顔立ちから忍術学園の上級生たちと同じくらいにみえる。

私がそれに近づいていくとそれはちょうど私の胸の位置に止まった。私とその重力に逆らうようにして浮いていた布団に手を伸ばした。

その瞬間、発光が消え落ちる。

とっさに手を伸ばし、布団ごと横抱きにした。

「うっ・・・」

急だったため一瞬よったが、

私はすぐに体勢を整えると、とりあえず私の長屋の部屋にそれを降ろした。

01「今夜も星がきれいだ。」（後書き）

いや〜。

どうなることやら・・・。

実際、私がこの間まで人物を把握していたのは
乱太郎、きり丸、 しんべエ、学園長先生、
へムへム、土井先生、山田先生、給食のおばちゃんだけです・・・。

※・・・しかも正確な名前は抑えてません。

この間、小学生以来にたまたま見た忍たまがおもしろくってびつくり！！

そんなこんなではじめてしまいました。

拙い文章ですがよろしくお願いします。

02「一樣、髪の毛。」

目の前のそれを観察することにした。

ゆっくり近づき掛け布団を剥がす。

バサッ

同時に飛び退く。

タンッ

分厚そうな見た目の割りに、掛け布団は軽かった。

少年は寝返りを打つ。

パタン

彼は袂の狭い上着と、裾の狭い袴を着ており、大小の刀に抱きつくように寝ていた。掛け布団や服の厚さを見ると少年がいた所は寒かったんだろう。枕のように使っている物は高くなく広くて柔らかそうで枕の役目を果たしそうにない形をしている。そして、手のひらサイズの四角く硬い板がその偽枕元に置いてあるのだった。

とりあえず、ここには私だけならまだしも、きり丸がいるため、話が済むまで、この刀は預かせてもらおう。私は少年をみながら、腕を刀の上からどかし、大小の刀を一本ずつスーッと抜き取った。すると、腕が伸びてきて私の指を掴んだ。

「っ！」

少年の口元が動く。それに耳を寄せた。

「・・・まって・・・。いかな・・・いで・・・。」

とても切なく呟く彼の顔は泣きそうだった。

寝言か・・・。

思わず頭をなげてやると、安心したのか何故かすりよって来た。

子どもだな・・・。

つい笑みがこぼれてしまう。

さて、こんなことをしている暇はなかったな。
危ないものはないかチェックしている最中だった。
忘れるところだった。

私は枕、掛け布団、敷布団の順にチェックした。
一様、髪の毛も。

髪の毛の中も結ってあれば武器を隠す格好の場だから。
少年の髪はまだ少し濡れており、少し癖のついた黒髪であった。髪
を漉くと良いにおいが漂ってきて髪の手入れがそれなりになされて
いるのが私にも分かった。思わず、自分の髪の毛と比べてしまい、
これなら4年は組の斉藤タカ丸に引きちぎられることはないだ
ろうと苦笑してしまった。

まあ、大体はみたか・・。

服も何かを仕組めるような襟や袂もないしな。

あとは、本人に直接聞いてみるしかないか。

私は丁寧に布団を掛け直し、
清酒の残りを口に含むと布団に入った。

02「一様、髪の毛。」（後書き）

土井宅にオジヤマです。

03 「土井先生。その内職お願いします!」

「土井先生。この布団のカタマリ何スか?」

きり丸の率直な質問に私は濁して答える。

「えゝまあ。いろいろあつてな。あつちよつと待て!!」

きり丸はその布団に手をかけて、ペロっとまくった。

「人じゃないっスか!!」

いつの間に土井先生、連れ込んだんですか?」

ゴンッ。

「いったあ。なにするんスかあ! 土井先生」

「きり丸。一言多い。」

これが話せば長くなることで……。かくかくしかじかなんだか・・。

あとでちゃんと話し・・。」

「いっけね。ちこくだあ!!」

「全然聞いてないな・・。まあいいが・・。」

「先生、朝食前にイノシシの散歩のアルバイト行ってきます!!」

「いってらっしゃい。気をつけて行けよ。きり丸。」

ダダダダダダッ

去っていくきり丸を見て、

今日は朝からアルバイトに駆り出されなかったことに胸をなでおろした。

中に入ろうとすると

ダダダダダッザザーッ

長屋の外で嫌な音が。

「土井センセー。」

やっぱりきり丸か・・。

「はい?」

嫌な予感がしてゆっくり振り返った。

「土井先生。その内職お願いします！」

扇子を扇子入れに入れてラッピングして置いてくださいね。小松田さんの家からのアルバイトですから手を抜かないで、しっかりやってくださいよ！」

先ほどから、気にはなっていた扇子の山で、あえて視界に入れないようにしていいのだがやっぱりそうだったのか・・・。
ガクッ・・・。

布団の上の少年はもう日が昇るというのにまだ寝ていた。きり丸のアルバイトの内職をしながら様子を見ていたが、起きる様子はない。寝返りをうっている所を見ると、気絶しているという訳ではなさそうなんだが。

とりあえず、近寄って行き声を掛けてみる。

「あのすみません。起きてください。」

反応なし・・・。

もう一度。

「あのすみません。起きてください。朝ですよ。」

反応なし・・・。

今度は肩を揺すってみることにした。

「あの、起きてください。朝です。」

「ん・・・。」

すると目の前の少年は目を開けた。

目を細めたり、2，3回瞬きをした。

「・・・うちじゃない・・・し・・・ここどこだよ・・・。」

「ここは私の部屋ですが・・・。」

少年は瞳の中に私を映すと一瞬びっくりした顔をしてすぐ目を細め

た。

「今・・何時代ですか？」

「室町の世ではありますが・・・。幕府はほぼ壊滅状態で、戦国の世となっているのが現状です。」

・・・・・。

「おやすみなさい。」

バサッ

なぬいゝ？　そういつてなんと少年はまた布団をかぶったのだった。
信じられない・・・。

1年は組みよりも寝起きが悪いなんて・・。
とりあえず、平常心。平常心。深呼吸して。

もう一度気を取り直して、肩に手を掛け揺らした。

「あの、起きてください。日が昇りましたよ！」

「もうすこしいゝ。」

だらしない。

なんともだらしない。

私は教育者として、許しては置けない状況に大声を上げた。

「おきなさあーい！！！」

03 「土井先生。その内職お願いします!」 (後書き)

土井先生・きり丸・結さんです。

04「だいたい体とは動かすためにあるんだ。」

私、時内結^{じないゆう}。19歳。

昨日の夜は自分の部屋で寝たはずなのに。
知らない人に起こされています。

「あの、起きてください。朝です。」

「ん……。」「

ここはどこだよ?? 電気がないし……。

「……。うちじゃない……。し……。ここどこだよ……。」「

「ここは私の部屋ですが……。」

すると、目の前にいた知らない好青年が答えた。

すかさず、私は最も重要なことを尋ねた。

「今……。何時代ですか?」

「室町の世ではありますが……。幕府はほぼ壊滅状態で、戦国の世となっているのが現状です。」

なにゆえ戦国? 戦乱の世ですよ!!

確実に死にますって!!

そんなのやだ。やめてくれえ。

せめて、現実逃避!!

「おやすみなさい。」

バサッ

私は布団を被った。

「あの、起きてください。もう日が昇ってますから!」

好青年が遠慮がちに揺らす。

そんなんじゃ起きませんよくだ!!

「もうすこしい。」

寝て、戻ればいいのに……。

「おきなさあーい!!」

そして、何故か私は布団の上で正座させられて説教をきいています。

「だいたい体とは動かすためにあるんだ。

惰眠を貪ってばかりいると……。

クド、クド、ガミ、ガミ。

ガミ、ガミ、クド、クド。」

そんなこと言われたって……。

ていうか、帰してほしいし……。

歴史は好きだけど、戦国だよ。

幕末ほど好きじゃないし……。

ドラえもん！助けてよ！

……なんていってもいないしね。

出て来い。ハークション大魔王!!

……これもだめだよねえ。」

私、どうやって布団ごとタイムスリップしたんだろう？

しかも、寝てて記憶ないし……。

ちよっと聞いてみるか……。

「あの……。何で私こんなところにいるのでしょうか？」

「それはこちらにも聞きたいところなのですが……。

実は昨日の夜、月を見ているときでした。急にあたりが暗くなり・

……。カクカクシカジカ。

……で、家に連れてきました。」

なるほどね。

にしても。

私は目を見開いて目の前の好青年を見つめてしまった。

「なんで、こんな空から降ってくるような怪しいやつ部屋に入れた

んですか？」

すると、前の好青年は後ろ頭を掻きながら答えた。

「外になんてほっとけないですよ。やっぱり困った人がいたら見逃せないというか……。見ていたのは私だけでしたし……。ハハハハ……。」

「だって私、未来から来たんですよ。」

好青年は目を見開いた。

「未来ですか……。異国かとは思いましたが。まさか未来とは……。あなたの服装や布団、荷物を見たら分かります。」

えつつつ！！信じるんですか？大丈夫ですか？この人。

その顔がなんか少年のように感じてつい結は青年に見入ってしまった。

「どんなところですか？未来は……。？

どうかしましたか？」

そういつて近づいてくる青年の顔から目をそらした。

「いや……。」

思わず、後ずさる。

「自己紹介まだでしたね。

私の名前は土井半助です。よろしく願います。」

「こちらこそ。

私は時内結じないゆうと申します。

以後、お見開きを。」

「そんな硬くしなくても結構です。未来から来たとなると、行くところもないでしょうから、どうぞこんな家でよかったらどうぞ。」

結の顔が変なものを見たっ！！という顔になる。

「あつても……。ご迷惑でしたら……。。」

なんていい人なんだ。

こんな人にかつてあったことがあっただろうか、いやない。感動のあまり好青年改めて土井の手を握った。

「いえ。ありがとうございます。居候させていただけるんですか！
働きますから、私。」
その迫力に土井は思わず、後ずさってしまった。

04 「だいたい体とは動かすためにあるんだ。」 (後書き)

結さんと土井先生です。

05「いつまで、見てるんですか。」

「まず、その着物をどうにかしないといけませんね。それじゃ目立ってしまいますから。」

土井は結の服を指して言った。

「確かに、このトレーナーとジャージじゃだめですよ。それに暑いし……。今、夏なんですか？」

「夏ですよ。だから、時内さんの格好を見たとき驚きまして……。あっそうだ。きり丸の売りに行く予定の着物があつたはず……。ちよっと待ってください。」

少したつて土井は若草色の小袖に藍色の袴を持ってきた。袴は江戸時代の武士のように長いものではなく庶民ということもあつてか短めにできており裾は足に縛り付けるような江戸時代の旅装風になっていた。

「どうぞ。着替えてください。」

着物を見てフムフムと頷いた。

「ありがとうございます。」

（なるほどね。）

土井さん、私が女だつて思つてないな。

ばかに近づいてくる距離が近いと思つた。

なんか……。悲しいかな。

まあいいけど。私『スリッパして可哀想な悲劇のヒロイン。私を見て！』ってタイプじゃないから。

ん……。でもこれ面白いかも……。フフフツツ。）

結は上に来ているトレーナーとジャージを脱いだ。

下に着ていたTシャツと短パンになる。

土井さんは服の構造が気になるらしくこちらを見ている。疑いもなく男だと思ってるな!! 畜生!!

「いつまで、見てるんですか。」

そういつてTシャツも脱ぎ去った。

土井の視線は結の上半身に向いていた。

「じ時内さん!! 早く着てください!!」

（／／／。／／／）

そんな慌てることないじゃん？

キャミだし・・・。

現代の日本ではこれよりも過激な格好をしたお姉さまたちがあちらこちらで色気ムンムンであるっていらっしやいますのよお!!

羞恥心でつぶれちゃえ!

「はゝい。」

わざとゆっくり小袖を羽織った。

土井の方を見ると後ろを向いて座っていた。

「どうかしましたか？ 土井さん。」

「どうかじゃないですよ!! 時内さん。女性だったんですね。どうするんですか・・・。若いおんながですね。男に住みますか？ と言われてホイホイ承諾しちゃだめですよ。ブツブツブツ・・・。」

その後ろ姿を見てちよつとイジメすぎたかと反省し、短パンも脱いで袴をサツと履いた。手首に付けっぱなしにしていたヘアゴムで頭の上の方で髪を結わえる。

「はい。出来ましたよ。土井さん。後でサラシ貸してくださいね。」

女性だって分かっていたら、私だって信頼の置きそうな違う家に頼んできたりしたのに・・・。

「一体あなたは何者ですか!!!!」

そういつて振りかえると利発そうな少年が立っていた。

「時内結。19歳。身長160cm体重はひ・み・つ。天秤座のO型。一応女で独身。いき遅れではありませんよ。未来では女性の結

婚の平均年齢は25くらいですからね。優秀で頼りになる弟がいます。好きなことは読書と歴史を学ぶことですかね。」

「なあにいゝ！じゅうきゅう？そんないい歳した娘がのこのこと男の家に！！」

「ですから。結婚適年齢はまだですって！！」

「そういう問題ではないんだ。あなたがふしだらといわれるんですよ！！」

彼女はキョトンとして私の顔を見上げた。

アタタタッ。また胃が・・・。

すると時内さんはいきなり飛びついてきた。

ぐはっ

づよい！！

「大好き！！土井さんって優しいんですね！」

「ですから・・・。」

「私がいつも男装してればいいでしょ？」

下から覗き込むように目をキラキラさせながら私を見上げた。

「へ？」

「違う？男なら関係ないんでしょ？私が男装すれば、土井さんも私も変な噂たてられないし。」

It's a win-win situation. です！！」

「いっつあういんういんすちえいしょん？」

「両者にとつて有益という意味です。」

それに声は低く出来ないから19は無理だけど、

15歳くらいならいけると思うし。ね？」

「確かにいけなくはないと思いますが・・・。」

そんなことでいいんですか？時内さんは。

女でないということは仕事だって過酷になりますし、扱いだって雑になります。」

（そういう土井さんの顔は本当に心配そうだった。ホントにいい人なんだな。こういう人っているんだ。）

時内さんは居住まいを正し、私の方を向いて座った。

「心配してくださり、ありがとうございます。しかし心配はご無用です。私が生まれ育った未来の日本では女性の権利が男性と平等に尊重されていました。しかし、この室町という時代、すなわち弱肉強食、下克上の時勢において強者であるということがものをいいます。女、子どもは強者の逆の弱者の象徴とも言え、支配されるもの位置する。ここで思う存分動ける強者となるためには社会的身分が保障されている男になりきる必要がある訳です。それに私は『この常識を変えその差別をなくそう!!』という面倒なことはする気がありませんしね。」

そういった凛々しい彼女の顔は歳相応に大人びて見え、瞳が透き通り輝いていた。

05「いつまで、見てるんですか。」（後書き）

結ちゃんやるねえ。

土井先生遊ばれています。

06「土井さん。その呼び方どうにかなりませんか？」

そんなこんなで今、居候しているきり丸って言う子のアルバイトを手伝っています。内容は扇子を扇子入れに入れてラッピングするらしい。こんな戦国時代にアルバイトやラッピングなんて横文字があると思います？なんかおかしいでしょ・・・。

「時内さん。」

すると私（土井）に時内さんは手を止めて向き直った。

「土井さん。その呼び方どうにかなりませんか？」

他人行儀みたいでそれいやです。」

そういう訳にはいきませんよ・・・。

男装をしているが、時内さんは女性だ。嫁入り前の娘に悪い虫が付いたと思われるは大変だ。

「そんなこと言われても・・・。女性にそのような・・・。」

すると、鼻から息が出る勢いで顔を近づけてきた。

近い。

この時代には普通の町娘がこんなに顔近づけることなんてないし、ほとんど血縁関係があるかしないと話しすらしなことがほとんどだ。それで、思わず身を引いた。

「その口調も嫌。こちらに身寄りが無い私としては寂しいです。」
う・・・。何なんだ。この時内結というのは。

今度は頬を膨らまさんばかりに下からキッと睨みつけてきたのだ。かと思えば、なんだか気色悪い顔でフッフッフツと笑い出す。

「じゃあ私、半助兄さんって呼びます？」

そういった彼女の顔は宝物を見つけたときのように輝いていた。

「え？」

「だって、歳のにも普通にいけるし・・・。誰かに身分を説明する時だって『遠い親戚の者です。』って言えばいいでしょ？」

なんかシツクリくると思った。

そうか、私はこの娘むすめを妹のように見ていたのか。
だから、純粹に可愛いと思ったし、愛おしいと思った。助けなければと思った。

「まあそうですが・・・」

でも、その半助兄さんはやめてください・・・」

「しょうがないですねえ土井さん戻しますよ。」

その代わり、口調は変えてくださいね！

『そうだな』ですよ！さっきのは。」

「いきなりは無理です。少しずつじゃ駄目でしょうか？名前だけは結と呼びますから。」

「分かりました。」

じゃあ、男装時の私の呼び方は？」

「結太郎？」

→これは時内さん、いや結が自分でつけていた。
とても適等でなんとなく名前にタロウを付けただけらしい・・・

「合格！！」

結の顔がパツと輝いた。

彼女の頭を撫でた。

「なあに？兄さん。あ違った。親戚の土井さん。なんか笑顔が黒いですけど・・・。」

彼女が見上げてくる。

「手を動かしてドンドン仕上げなさい。さっきから見ているじゃなく、ずっと作業が止まっているじゃないか。」

「ゲッばれた？」

結が首を竦めてこっちを見た。

改めまして読書の皆さん。

こんにちは！！

時内結です。（＾Ｏ＾）／

なんだかんだで来ちゃいましたが、ここの人たち（っていうかひとり？）は優しいです！

1人で心細いですが、いつかは帰れるのですから、死なない程度に楽しめたらって思っています。

そして、カクカクシカジカで男装してます！

そのキャラ設定を分かりやすく紹介します。

「私は時内結^{じないゆうたりよう}太郎です。

歳は15でO型の天秤座。背がもっと大きくなったらという密かな願望を持つ男です。土井半助さんの遠い親戚です。よろしく」

06「土井さん。その呼び方どうにかありません？」（後書き）

時内結太郎くんがんばれ!!!

拙い文章でホントすみません!!

同時に読んでくださりありがとうございます!!

07「ほら。やっぱり信じてないでしょ？」

ん？

ガコガコしている？

その床を少し持ち上げてみると大量の短刀、火矢、鉄砲などがきれいに並べてあった。良く見ると柱や床に刃物の傷跡が所々あるのを見つけることができる。先ほど、後ろから近づいてくる彼の気配が分からなく、違和感があったことを思い出す。

なんだ・・・。

信じるなんて嘘じゃん。

疑ってんでしょ？

私が害があるか調べるために監視しているんでしょ？

素早く近くの床下に仕組んであった短刀を彼に投げつけた。

ザシュツ

キンツ

とっさに胸元に入れていた苦無で弾く。

彼女の目は色をなくした。

「ほら。やっぱり信じてないでしょ？土井さん、忍者でしょ？それクイナだし。」

信じることの知らない目・・・。

私は思わず、彼女の構えた2本目の短刀に目を向けた。

キンツ

キン

カンツ

カツ

刀音が響く。

強い。

彼女の剣は力強く、斬新な動きをしており、刀筋を読むのが非常に難しかった。迷いのない刀筋で実戦経験があることが伺える。その割りに急所をワザと狙っておらず、彼女の優しさを感じた。

可哀想に・・・。

そんな顔しなくてもいいのに。

シュッ

痛ッ（つッ）

頬に痛みが走る。

赤い線が無一文字に入っていた。

これだけ手練だと正当にやっていたら終わらない。

彼女を見ると笑っていた。

とても冷たく、先ほどの太陽のような笑顔とは真逆の笑顔でただ笑っていた。

07「ほら。やっぱり信じてないでしょ?」(後書き)

わお!!

拙い文章で申し訳ありません!!

同時に読んでいただき、ありがとうございます!

08「っ待て!!きり丸。これは違うんだ。」

彼女を見ると笑っていた。

とても冷たく、先ほどの太陽のような笑顔とは真逆の笑顔でただ笑っていた。

「私を何に使いたいの？」

私使われる気なんてないし。

こんなことなら、信じなきゃよかった・・・。

一応助けてもらったら、礼として

もう二度とあなたの前には現れないから。さよなら。」

そう私に後ろを向けた。

とっさに煙幕を張る。

見えないにもかかわらず、こちらの位置を的確に抑え、持っていた

小太刀を振り下ろす。

足でその腕を蹴り上げた。

ガッ

小太刀を手放させる。

カラン

私は煙幕の中から彼女の身体を掻き抱いた。

「やめっ！」

「誰もそんなこと言ってないじゃないか。」

私は確かに忍者で、忍術学園と言われる忍者のたまごを育てる学園で教師として教えている。

結が疑うこともわかる。

結が私のことをなんと言おうが、

私がキミを信じていることは変わることはないことだ。

もっと人を信じなさい。

私は結を使おうなんて考えていない。

それに結キミが未来から来た人であろうがなかりうが、関係ないし

重要なことではないと思う。

私は結キミを信じている。

私は結の味方だ。」

気がつくとも腕の中の抵抗はなくなっていた。

「土井さん……。なんでそんなに優しいんだよ。」

土井さんのバァカ!!」

目元に真珠をキラリと一粒光らせた彼女はいきなり首にとびついた。

「うわっ。倒れる!!」

思わず、尻餅をつく。

「あ痛たた……。もうちょっと気をつけなさい。」

「大好き。」

そう見上げる結を抱きしめ、頭をなでた。

(妹ってこんな感じなのか……。)

ガラガラゴロゴロ

その体勢のまま、二人は音のした入り口の方を見た。

すると、きり丸が手に持っていた野菜をすべて落とし2人のほうを見ていた。

「土井先生!朝っぱらから何やってるんですかぁ!!」

確かに、きり丸が言う通り、私が結をかどわしているようにしか見えなくものない。

土井は慌てて、パッと結を離れた。

「おい。」

「見損ないました!!」

タタタタッ

「っ待て!!きり丸。これは違うんだ。」

クッククッ

横を見ると結が腹を抱えて笑っていた。

「可愛らしい。奥方がいらっしゃったんですね。

浮気現場見られちゃいましたよ。クククッ

修羅場です!!!

『見損ないました!!!』

『あつ待て!これは違うんだ!!!』

アッハハハハhA!!!」

「人の不幸を笑うな結・・・。」

「にしても大変ですよvvvv。」

私、男にみえますもん。

女ならまだしも、男だと思ったあの少年はショックですよ。可哀

想に・・・。」

そういう結の顔は悪戯を成功させた少年の顔だった。

「胃が・・・。」

土井は胃をさすった。

08「っ待て!!きり丸。これは違うんだ。」(後書き)

土井先生、浮気はしてはいけません・・・。

拙い文章で申し訳ありません!!

同時に読んでいただき、ありがとうございます!

09「ぜにぜにZENIい!!」

「で、彼は誰ですか？」

「摂津のきり丸だ。」

戦で村を焼かれて家と家族を失って、忍術学園に入学。学費と生活費を稼ぐため、いつもアルバイトをしている。夏休み等の長期休暇中は全寮制の学園も閉まっているので、私の家に居候しているんだ。生育暦のせいもあるのか、とてつもなく金銭に執着があるんだ。でも直向^{ひたむき}で絶対に諦めない所（↑金にかな?? by 結）があって、とてもいい奴なんですよ。」

そうきり丸君の説明をする土井さんの顔は父親がわが子を見るような表情で、こっちまで胸がキュンとしてしまった。

まあどうにか。

半助さんが手から小銭を落とし、

チャリン

ダダダダダッ

「ぜにぜにZENIい!!」

っと、おびき寄せたきり丸に上手にそれを使って、さっきのことは納得させていた。

「……でこちらの人は誰ッスか？」

「私ですか？」

私、本日から居候させていただく時内結太郎と申します。O型、天秤座の15歳です。こちらの土井さんの遠い親戚にあたります。よろしく願います。」

「こちらこそ。オレも居候させてもらっています。撰津のきり丸といいます。1年は組のよいこです。

好きなことは金稼ぎです。

好きなものは安いとお金と無料タダです。

こんな汚い家でよかったら・・・。」

ゴンッ

「いだいあ。土井先生何するんスカ!!」

「一言多いって、いつも言ってるだろう!!きり丸。

しかも、今この家に広がっているのはお前の売りに行く予定の古着、小松田君からの扇子の内職のほかに10以上の様々の内職が所々にまとめて山になっているおかげだろ!!」

「まあまあそんな硬いこといわないでくださいよ!」

「だいたいな・・・ブツブツブツ。」

「これ（土井さん）大丈夫?」

胃を抑えながらブツブツ言っている土井を結が指した。

「気にしないでください。そのうち、こっちに帰ってきますから。」

「ふうん。あのさ、きり丸。違った。きり丸君。

どこかで会った事ない?」

おかしいなく。絶対どこかで、会ったことあるきがするんだけどねえ・・・。

「いや、初めてだと思いますけど。それと、オレきり丸でいっスよ。」

まあ、いっか・・・。

「あっそう?ありがとう。じゃあ名前だけで呼ぶ。きり丸!」

「ハイ。」

目の前の結太郎さんは手を差し出してきた。

「???」

「手を出して、ハイ握手。よろしくね!!」

「はい。よろしく願いします。」

こうして、時内結は晴れて土井家の居候になりましたとき。

チャンチャン。

09「ぜにぜにゼニZENIい!!」(後書き)

きり丸登場!!

→前話からだっけ?

『玉手箱』に01章『居候』の小話入れてみました!!
よかったら見てください。

拙い文章で申し訳有馬せん。

同時に読んでくださりありがとうございます。

10「ゆらり」

「お掃除！おそうじ！

ルンルンルン。」

隣のおばちゃんたちに怒られるので朝食の前に、結は玄関前を掃いていた。

「ん？」

急に目の前がかげったので、顔をあげると、

「ゆらり」

「ゆらり」

男の人がふらふと倒れてきた。

結はさっと支えようとしたが、

「おっと。」

あまりにも急だったので支えきれず

「ゲッ」

すってんころりん。

「ぎゃ～！！」

「どうした！！結。」

土井が結の叫び声に外を見ると、結が男に押し倒されていた。
土井は無言で

ベロツと

その男を剥がし、

ポイツと

捨てた。

「結、何もされていないか？大丈夫か？」

「あたたた。」

この人が勝手に倒れてきたので、支えようと思ったら、全体重かけてくるから、倒れちゃったんですよ！！」

「何にもされていないんだな・・・。」

「だから、大丈夫ですって！！」

結の無事を確認すると、土井は先ほど剥がした男を見た。

「！！！！！！戸部先生じゃありませんか！！」

「お腹が空いて・・・。」

「しょうがないですね・・・。」

10「ゆらり」(後書き)

第2章に突入しました!!

拙い文章ですみません。

同時に読んでくださり、ありがとうございます!!

11「ここで会ったが、100年目!!」

私の右横に土井さん、戸部先生、きり丸とみんなで食事をしながら庵を囲む。

「ふん。」

戸部先生は忍術学園の剣術指導の先生なんだ。

いいな。私もしたい・・・。」

この間、きり丸にきいたらさ。

土井さんも先生だし、きり丸も生徒だから

この夏休み終わったら学園に戻っちゃうって聞いたからさ。

「結太郎さん。」

剣術指導の先生になるならものすごく強くないといけないんっスよ

！戸部先生は、今まで戦場や試合で一度も負けたことがなんです。」

「へえ。すごいね!!」

でも、私も戦場や試合で死んだことないよ。」

「それは普通でしょ？」

「きり丸が思っているほど、私弱くないんだけどな。」

ワンワンわあゝああん

「・・・犬？ちょっと外見てきますね。」

結は立ち上がって外に行った。

するとそこには人面犬が!!

「じっじんめんけん・・・。」

結はその奇妙さ気味悪さに一歩退いた。

「たのもー。」

「つしゃべった・・・。」

「こちらに戸部新左エ門はいるかー!!！」

結は身を翻し、土井の背中にサッと隠れる。

「土井さん!! 入り口に人面犬がいる!!」

すっごい気持ち悪いんですど!

しかも、ヒトの言葉話すんですよ!!」

すると、人面犬が立ちあがり、中に入ってきた。

「ッヒイ(キモッ!!)」↑結

「犬ではなくいい!!」

はなぶさまきにすけ

私は天才剣豪の花房牧之介なのだ!!」

「なんだ。花房牧之介か。」

きり丸が食事に戻る。

「牧之介か・・・。」

戸部も食事に戻る。

「あのすまないが、花房牧之介。家から出て行ってくれ。」

土井が立ち上がって追い出す。

「え。そんな扱いでいいの?」

「いいの。いいの。牧之介に関わるとろくな事にならないんツスよ。」

きり丸がすまし顔で答える。

「お前らに用はな〜い!!」

戸部新左エ門!!

ここで会ったが、100年目!!」

「うるさい。」

ドサッ

きり丸に木刀で叩かれ、牧之介は失神してしまった。

「よわっ。」

土井に外に捨てられる。

「で、花房牧之介って？」

「花房牧之介は自称剣豪。戸部先生のライバルと一方的に名乗り、やたら勝負を仕掛けてくるが毎回自滅・惨敗しているんです。オレにだって、負けるんですから。とてつもないトラブルメーカーなので戸部先生だけでなく、忍術学園中の人みんなに煙たがられているんですよ。まあ調子が良く、無駄に前向きなおめでたい性格はいいところと言ったらいい所なるんでしょうけど……。結太郎さん絶対関わらないほうがいいッスよ。」

「……。」

なんか、牧之介って残念なヒトだね……。

関わらないようにするよ。

人面犬、気持ち悪かったもん。」

11「ここで会ったが、100年目!!」(後書き)

花房牧之介の登場!!

花房牧之介の変装は引きます・・・。

人面魚とか・・・。

拙い文章で申し訳有馬せん。

同時に読んでくださりありがとうございます。

12「戸部先生はどうしてこちらに？」

食事をし終わって、結が緑茶を出すと土井が尋ねた。

「戸部先生はどうしてこちらに？」

「学園長命令で急に忍務に出ることになった。

新学期までに帰って来る事はできないだろうから、代わりになるような御仁がいたらと思います、土井先生の所に来て見たのだが……。」

結の頭で電球がキラ〜ンと光った。

「わたすっ私がやります！」

ちよっとぐらい。噛んだって気にしない！！

戸部先生の手をとった。

（結っ。手を握るな！！）↑土井心の声

「時内結太郎くんが？」

「はい！！私これでも強いんですよ！」

（っ顔が近い！！）↑土井心の声

「まあまあ兎に角。試してみないことにはどうにもなりませんから。外に出ましょう。」

土井はしっかり結と戸部の間に入っては2人を放した。

場面変わって空き地に來ています。

「はい。これ結の刀。」

「なんで……。私の大小土井かたなさんが持っているさ？」

じっととした目で私は土井さんを見た。

「最初一旦預かったんだ……。」

これにはカクカクシカジカ理由があって……。」

「もういい。後で聞きますから。」

今は集中したいので向こうに行ってください。」

「ヴァ・。。ゆう。」

「土井先生。タジタジっすね。」

何故かきり丸に土井さんが慰められていた。

久しぶりに握るこの刀。

この刀はあるヒトに貰ったもの。

思わず、目を細める。

私がんばりますから。

自分の道は自分で切り開かなきゃ行きませんから。

私は心を落ち着け構えた。

「戸部先生、行きますよ。」

「ん。ゆらり。」

両者が同時に動いた。

12「戸部先生はどうしてこちらに？」（後書き）

戸部先生VS結ちゃんです！！

拙い文章で申し訳有馬せん。

同時に読んでくださりありがとうございます。

13 「結太郎君。キミもなかなかだ・・・。」

私は心を落ち着け構えた。

「戸部先生、行きますよ。」
「ん。ゆらり。」

両者が同時に動いた。
時々

キン

キン

キンッ

カン

カンッ

カン

と聞こえるが二人の動きを見定めることはまったく出来ない。

「土井先生。見えません。」

「ああ。」

「結太郎さん。ホント強いんッスね。」

「ああ。」

ザザーッ。

ズズーッ。

カチャ。

カチャ。

両者が刀を納めて地上に降り立った。

結の頬から数箇所血が出ていた。

（ハアハアハア・・・。）

さすが、教師だけはある・・・。

マジ強えし・・・。

しかも江戸時代の剣術とは違い、さすが戦国時代で、型に嵌はまっていないので動きが読みにくいし。

(>—<)!!

我ながらうまくいかなかった・・・)

「ハアハアハア・・・戸部先生。なかなかやりますね・・・」

戸部の髪が不自然に断ち切られていた。

「結太郎君。キミもなかなかだ・・・」

この若さでここまでとは・・・。

なかなかやる。

つい手加減を怠ってしまった。

強い・・・。

よし、時間もないことだ。

結太郎君に剣術師範の代理を頼むでしょう。

戸部は居住まいを正して、結のほうを向いた。

「結太郎君。私はキミに忍術学園剣術師範代理を任せようと思う。忍務から帰ってくるまで間なのだが、頼んでも良いだろうか？」

結の目がキラーンと輝いた。

「ホントーデスカ!!」

結が戸部の手をまた握った。

(っ結。顔が近いっ。)

「ああ。」

「ありがとうございます!!」

私、仕事がほしいなって思ってたんです。

なんかずっと居候じゃあ悪いじゃないですか。

それにきり丸や土井さんと一緒に居られますし!!

あっそうだ。戸部先生。

学園の方への連絡はどうしましょうか？」

一方、土井くく心の声＞＞。
戸部先生だって男だぞ・・・。
そんなに近づくんじゃない。
あ！戸部先生の手を握るな・・・。
顔が近いと言ってるだろうっ。
剣術師範代理なんてして大丈夫だろうか？
危ないじゃないだろうか。
未来から来ているから分らないこともあるだろうし。
いつも私が見てあげられる訳はないからな・・・。
あっ！！
怪我してるじゃないかつ。
嫁入り前の娘が顔に傷を作るなんてっ。

「ああ。それについては学園長には代理の者を送ることの許可は取
つてある。書状を今から認めるから、それを持っていきなさい。そ
れと・・・。」

「結っ！！怪我してるじゃないかつ。」

土井が戸部を遮って結の前に割り込んだ。

「あ。ホンとだ。気付かなかった。」

「気付かなかったじゃないだろっ！！」

もう少し気を付けなさい・・・。」

「はいはい・・・。だいじょうだつて・・・。」

「大丈夫じゃない！！ガミガミガミガミ！！」

「うるさい・・・。」

「うるさいじゃない！！」

だいたいキミは・・・ガミガミ・・・。」

（イチイチうるさい・・・。）

こんくらいの傷大丈夫だし・・・。

長いな。つまらん。

えつとあの唄なんだっけ？

あつそうそう・・・。

♪チャラチャッチャッチャラッチャー

チャラチャッチャッチャラッチャー

チャラチャーチャラチャッチャラチャラッチャー

右から 右から 何かが来てるゝ

僕は それを 左へ受け流すゝ

いきなりやってきたゝ 右からやってきたゝ

ふいにやってきたゝ 右からやってきたゝ

僕はゝ それを左へ受け流すゝ

そうだ！思い出した！

ムー〇イー勝山の『右から左へ受け流す唄』だ！！！

「分かったか？結。」

「はゝい！」

（今の返事・・・。本当に分かってくれたのだろうか？

う・・・。胃が・・・。）

土井は胃を抑えた。

「きり丸・・・。土井先生、何かあったのか？」

「さあ？」

きり丸と戸部はいつもとは違う土井の様子に顔を見合わせた。

13「結太郎君。キミもなかなかだ・・・。」（後書き）

土井先生振り回されてます。小娘に・・・。
可哀想に・・・。

当初はこんな予定では無かったのに・・・。
次は忍術学園までいけるかな？

拙い文章で申し訳有馬せん。

同時に読んでくださりありがとうございます。

14「ぎゃああああああ」(前書き)

すごく短いです・・・。
プロローグ的な感じです。

14「ぎゃあああああ」

私、結です。

高い崖から落ちて、足を痛めて伸びています。

「いだい・・・。」

先ほどまでですね。

あの前に見える高い崖の上をきり丸と土井さんと一緒に忍術を習うための学校『忍術学園』（↑なんかこの響き聞いたことがある気がするんだよなあ・・・）に向かって歩いていました。あまりに話が弾んでいたため気付かなく、うっかり足を踏み外しました。

「結!!!」「結太郎さん!!!」

そして、ゴロゴロゴロゴロ

「ぎゃあああああ」

ガコッ

木にぶつかってやっとの事で止まり、伸びてます。

「やっと止まったけど。体のあちこちが痛いし、足は捻挫しちゃっ

た。動けないじゃない。しかもはぐれちゃったから、場所もわかんないし……。私死んだ。寝る。」

14「ぎゃああああああ」(後書き)

また、少し続けてアップできると思います・・・。

拙い文章で申し訳ありません!!

同時に読んでいただき、ありがとうございます!

15 「ボクたち、忍術学園に帰る途中なんです。」

読者の皆さん。こんにちは！

わたしは猪名寺乱太郎と言います。

実はこの物語の主人公のはすなのですが、なかなか『ふくろう忍者の学園しろ』には登場させてもらえていません。そこで、1年は組持ち前のキラキラオメメで、頼み倒してみました！そして今回見事！！立花先輩の紹介の任を勝ち取り、こちらで出させてもらっています！！

こちらから美しくキラキラ登場されたのは六年い組で作法委員長の立花仙蔵先輩です。六年生なので15歳で山羊座、AB型です。火薬の扱い・知識にかけては忍術学園一で、冷静沈着で優秀な先輩として、得意武器は焙烙火矢です。その他、様々な火器を自作することもあります。サラサラストレートヘアーランキング第1位なんですって！座右の銘は「忍術とは科学である」だそうです。忍たま長屋では学園一ギンギンに忍者している潮江文次郎先輩と同室です。しんべエ・喜三太と3人で登場するエピソード（通称・厳禁シリーズ）がありまして、毎回火薬と最悪な相性の2人（鼻水となめくじによる湿り気）のせいで思い通りに事が進まず、焙烙火矢の爆発で終わるのがお決まりになっています！！

それでは、私はこれで。

また会いましょう！

「「六年い組の立花仙蔵先輩！！」」

「ゲッ。お前たち！！」

私の目の前に現れたのは、一年は組のあの（・・・）鼻水の垂れている福富しんべエとあの（・・・）ナメクジの大好きな山村喜三太だった。湿気の嫌いな私が唯一苦手とする二人だ。

「なぜこんな所にいるんですか？」

それはこっちが聞きたい。

何でこんなところにいるんだ？？？

この二人に出会うとろくなことがないんだ。

今日は本当についてない・・・。

「実践演習の最中だ・・・。喜三太としんべエは何故こんな所に？」

「学園長先生に金楽時の和尚さんのところまでお使いを頼まれて。」

「ボクたち、忍術学園に帰る途中なんです。」

「忍術学園の方向はまったく逆だが・・・。」

「そうだったんですかあゝ！森の中に大きなナメクジさんが入って行くのを見て！！」

「喜三太と一緒においかけたら迷子になっちゃいました。」

「どうして、いつもお前たちは・・・。」

「「一年は組のお約束です！！」」

元気に声を合わせて言わなくていい・・・。

「立花先輩。どちらの方向に行けばボクたち帰れますかあゝ？」

「あの方角だ。」

私はまっすぐ忍術学園の方を指し示した。

目の前の二人は目をキラキラさせて、私を見上げてきた。

「さすが立花先輩！！」

「ありがとうございます！！」

「「それでは、ボクたちは失礼します。演習がんばってください。」」

「ああ。」

2人が背を向け、視界から消えたことを確認した。

「よし、行ったか。」

もう出会わないことを願う。

何の策略か知らんが、いつものパターンから分析すると、必ず会う気がしてならない・・・。

せめてもの抵抗でなるべく学園の方には行かないようにしよう。

シュツ

仙蔵は木々の中に姿を消した。

15 「ボクたち、忍術学園に帰る途中なんです。」 (後書き)

厳禁トリオの登場です。

乱太郎君ごめんなさい・・・。

まだまだ、キミは出てきそうにないです・・・。

拙い文章で申し訳ありません！！

同時に読んでいただき、ありがとうございます！

16「10点!!満点です!」

＜一方、しんべエと喜三太。＞

しんべエ。6年い組の立花仙蔵先輩に会えてよかったね。」

「うん、喜三太。何でも、今回は立花先輩はい組とろ組とは組対抗の実践演習で敵陣を探りに行くところだって言ってたね!」

「うん。立花先輩ってカッコいいよね!」

「今日だって帰り道教えてくれたし。」

「でも、ちよくと抜けてるとこあるよね。」

「うん。ボクたちが助けてあげなくちゃだね。」

＜仙蔵に戻る。＞

しんべエと喜三太と別れ、仙蔵は裏山から裏裏裏山まで来た。

「ここまでくれば大丈夫だろう・・・。」

さて、文次郎のやつどこにいった?」

「@☆%&，，（，%\$，&%@!;!」

大声を出せば聞こえるぐらいの範囲で誰かが話しているのが聞こえた。

フム、誰だ・・・。

は組か?ろ組か?

仙蔵は木の上から様子を窺った。

!!!!!!

なんで・・・お前たちがいるんだ・・・。

そこには先ほど裏山で別れたはずのしんべエと喜三太がいた。思わず足を踏み外し、下に落下する。

つまずい。

クル

一回転し、

スタツ

キレイに着地した。

「10点！！満点です！」

「立花先輩！お見事！！」

「しんべエ、喜三太っ！」

誰もそんなことやれと言っていないだろう・・・。

何で、お前ら裏山にいたのに裏裏裏山にいるんだ！」

「あのですね。」

「ボクと喜三太はまっすぐ仙蔵先輩に言われた方に向かって歩っていたんです。」

「そしたら、3年ろ組の決断力のある方向音痴の神埼左門先輩が現れて・・・。」

「一年は組のしんべエと喜三太じゃないか！！」

お前ら忍術学園までの道はこっちだー！！」

「ちよっと神埼先輩ー！！」

「まってくださーい！！」

二人は手を引っ張れられて明後日の方向に連れて行かれてしまった。

「あっ!!」

「どうしたんですかぁ？神埼先輩。」

「喜三太。しんべエ。」

オレは忘れ物をした。

今、取ってくる。待ってろよ!!!」

ダダダダダッ

左門は二人が声を掛け止めようとしたが、そこは三年生、追いつけなく走り去ってしまった。

「神埼せんぱーい！」

「ちよっと待ってくださいーい！」

「ハアハア。。。ハアハア。。。だめだ。。。」

「ハア。。。しんべエ。ハア。。。行っちゃったね。」

「喜三太。神埼先輩、戻ってくると思う？」

喜三太が首をふる。

「ううん。絶対戻ってこれないと思う。」

「なんか、ボクたち。また迷っちゃったね。」

「そうだね。」

!!!!!!」

「どうしたの喜三太。」

「しんべエ。あそこ見て。誰かが倒れてるよ。」

喜三太が指し示した方向をしんべエが見るとそこには人が木にもたれ掛かって座っていた。

「ホンとだ。」

「どうする？しんべエ。声掛けてみる？」

「やめよう。喜三太。面倒ごとに巻きこまれるのは一年は組のお約束だから。」

「でも、見る感じだとあの怪我しているみたいだよ。」

「じゃあ、声掛ける？」

「そうしよう。こんなところに怪我しているのにほっといたら可哀想だし。」

二人は木に近寄っていく。

「あのく大丈夫ですか？」

しんべエが声を掛けた。

16「10点!!満点です!」(後書き)

左門出てきた。

回想シーンただけけど・・・。

やっと結ちゃんに遭ったようです。

拙い文章で申し訳ありません!!

同時に読んでいただき、ありがとうございます!

17「早起きは三文の得？ いやいや・・・」

二人は木に近寄っていく。

「あのく大丈夫ですか？」

しんべエが声を掛けた。

「・・・。」

反応なし。

「あのどうしてこんなところにいるんですか？」

「・・・。」

反応なし。

今度は喜三太が木の枝を使って、ツンツンした。

ドタ。

木でツンツンされた拍子に、その人は背もたれにしていた木から滑って地面にたおれた。

「・・・。」

反応なし。

「ボクたちだけじゃどうにもならないね。喜三太。」

「そうだね。しんべエ。誰か呼ばないとだけど・・・。」

ぐう。

「喜三太。ボクもう限界。おなか为空いたよ。」

しんべエが座り込こんでしまった。

「さつき、食べきっちゃったもんね。お菓子。」

「・・・ってわけなんです!!」

「ホント・・・お前らは・・・。」

仙蔵は懐からおにぎりを2つ出すとしんべエと喜三太に与えた。

「さすが!!立花先輩!!」

「ありがとうございます。」

キラキした目で二人が見上げて来た。

2人がおいしそうににぎりを食べているのを見ると、立ち上がったその不審人物に近寄った。

刀を大小の2本指していて、旅装の格好をしていた。大小のかすり傷が体中にあり、服が所々破れているところを見ると崖の上から落ちたってところだろう。見ためからみると、歳は私か5年くらいか。

片手を胸元にしまっている苦無に手を掛けると声を掛ける。

「おい。」

反応なし。

今度はその人物の手を見た。

思ったより細い手をしていた。

フム。手裏剣タコはないか・・・。忍者ではないのか。

「おい。」

もう一度声を掛け、揺らしてみた。

「スー・・・。」

もしかして、こいつ寝ている?

「ん、・・・。」

パタン。

寝返りを打った・・・。

何なんだっ。

しんべエも喜三太もこいつも!!!!!!

ハラ。

「せんぱい。寝返りでこの人のあわせから」

「何か出てきました。」

「手紙か・・・」

仙蔵が包んであった風呂敷を広げた。

そこには忍術学園園長大山平次渦正殿と記してあった。
！！！！

後ろに裏返す。

戸部新左エ門。

一体何者だ？

戸部先生から文を託されたのか？

それとも、盗んだのか？

どちらにしても、これと手紙は学園に持って行く必要があるだろう。

「どうしたんですか？」

「ん。なんでもない。」

「えー。ウソはついちゃいけないですよ！！」

疑わしいいそうな顔をして下から私を見上げる。

「よし。怪我をしているこれも含め、お前たちを学園に連れて行ってやろう。」

話題を反らしてみる。

「えっホントですか！！」

「やさしいいー。立花せんぱーい。」

まんまと引っかった。

そして、今度はキラキラと効果音が聞こえそうな目をして、私を見上げた。

「ついて来い。」

仙蔵は結を背負った。
思ったより、軽いな。

モゾモゾ

っ起きたか？

「スー。」

いや、寝息までたてて寝ている。

「ん。。。」

首の辺りにこそばゆさを感じた。

私に担がれているそれをみれば私の首に手を回し、顔を埋めた。

「。。。。母さん。」

。。。。

喜三太としんべエがこちらを見上げる。

「ぷっ！！喜三太！！」

「しんべエ！！立花先輩が母さんだって！！」

顔がみるみる間に歪んでいく。

私が先輩だから、多少は笑うのを我慢しているつもりであろう。しかし、喜三太としんべエの顔はひどい顔になっており、すでに笑われたのと等しいくらいの顔つきになっていた。

思わず、肩を振るわさないことにはいられない。

「クククククッ」

「フッフッフウッフッ」

ブチッ

。。。。もう。

「。。いい加減に。。しろ！！」

仙蔵は胸元に仕組んであった焙烙火矢をしんべエと喜三太に投げつけた。

「わぁ！！」

「ごめんなさ〜い！！」

一年は組のくせに、上手に逃げやがって！！

「でも、立花先輩が母さんってなんか当たってるかも〜」

「喜三太もそう思った？ボクも！！」

「なんだと!!」

「わあ。」

「にげろー!!」

「まて!!」

そんなうるさい騒ぎの中、後ろに担がれた人はというと・・・。

「もお・・・。母さんに頼（↑弟）ってばちよつと部屋が汚いくらいで、怒んなくなたっていいじゃん・・・。まだ、朝早いのに起こさないでよ・・・。早起きは三文の得？ いやいや・・・損だな・・・。何違うって？ 徳？・・・なんで頼。得じゃなくて徳なのさ？・・・フムフム・・・。徳には徳や徳が高い品性があるという意味がある・・・。だから・・・。品性の欠片もない結にはちよつとでも早起きして微々たる徳でも高めた方がいいだって？・・・ああ・・・もう決めた・・・。絶対起きないし・・・。スー。」

・・・などと、寝言をいって寝ていた。

焙烙火矢をしんべエと喜三太に投げていることに気をとられている仙蔵には聞こえないようだったが・・・。

17「早起きは三文の得? いやいや・・・」(後書き)

《おまけ》

演習終了後忍たま長屋にて

「留三郎!!」

「ん?」

「あの二人縛っとけ!!」

「あの二人?」

「お前の用具委員の後輩の一年は組の福富しんべエと山村喜三太だ!!」

「そういや、仙蔵おまえあいつら苦手なんだっけ?」

「あいつらのせいで!! 今日の演習は!!!!・・・が!・・・そして・・・こうで・・・・・・だった!!!!」

クダクダクダクダ。

「・・・・で・・・・だ。その上、・・・・だ!!」
クダクダクダクダ。

「・・・・仙蔵! ウチの後輩が悪かった。

よく言っとくから。ゴメンな。」

「・・・・ああ。」

爽やかに食満に言われ、赦してしまう仙蔵だった。

結ちゃん。疲れたんですね。

最初から立花先輩におぶられるなんて・・・・。

全国の立花仙蔵先輩ファンに怒られますね。
しかも、お母さんとかいってるし。

拙い文章で申し訳ありません!!

同時に読んでいただき、ありがとうございます!

18「おかえり」。入門表にサインしてください。」

一方こちら、土井ときり丸。

「土井先生！どうでしたか？」

「見つからない・・・。遠くには行っているはずはないと思うが・・・。とりあえず、ここから学園まではそう遠くない。一度、荷物を置いてきてから探しに行くぞ。」

「はいっ！」

二人は学園へと足を進めた。

厳禁トリオに戻します。

色々ありましたが、無事に学園の門前に着くことが出来ました。

「よかったね！着いたね！喜三太。」

「うん。これも立花先輩のお陰！」

「立花先輩、ボクたちを連れてきてくれてありがとうございました！！」

「ああ・・・。」

はやく、私の前から消えてくれ・・・。

ギー。

学園の門から事務の小松田さんが顔を出した。

「一年は組のしんべエくん、喜三太くん、6年い組の立花仙蔵くん。おかえり。」

入門表にサインしてください。」

「はい！！」

「分かった。」

サラ サラ サラ

「はい。小松田さん。」

喜三太が小松田に入門表を返した。

二人はとびっきりの笑顔を立花に見せる。

「「それでは立花先輩。どうもありがとうございます！」「これで別れられると思うと笑みも自然に浮かぶ。」

「ああ・・・まっすぐ一年の長屋に行くんだぞ。」

「「はい！！」」

しんべと喜三太の姿が視界から消えたの確認すると、自らも医務室の方に向かった。

小松田はそんな三人を見て首を傾げた。

「それにしても・・・。さっき立花くんに背負われた人どっかで見ただなあ・・・。うーん。どこだったかな？」

あつ！思い出した。きり丸くんと扇子を置きにきた・・・土井先生のところの居候の結太郎さんだ。気絶しているみたいだったからしやうがないですね。後で、入門表にサインしてもらわないと・・・。」

ギー

忍術学園の門が開く。

「はーい！今行きまーす！！」

「土井先生。きり丸君。おかえりなさい。」

入門表にサインお願いします。」

「「はい。」」

サラサラサラ。

「なんか二人とも忙しいですか？そんな怖い顔をして。」

「そうなんだよ。野暮用が入ってしまっ。それでは。」

土井が頭を掻き、苦笑いをしながら長屋の方に足を向けた。

「じゃあ。小松田さんまた！」

きり丸が土井の後に金魚のフンの如くついて行く。

「あっそうそう。土井先生のところの結太郎さん忍術学園に来たようでしたよ。」

ピタッ。

二人の動きが止まる。

次の瞬間、二人の顔が小松田の目の前に迫ってきた。「それはどう言うことですか!!!!!!」

小松田はその顔の迫力に一步下がった。

「よく分からないですけど。立花君に背負われて行きましたよ。怪我をしていて意識もはっきりしていないように見えましたけど・・・」

「で、結太郎さんはどこに行っただんっスか？」
きり丸が小松田さんに詰め寄る。

「きり丸君。そんな近寄れても・・・。」

分からないけど、医務室かもしれないよ。」

「よし。行くぞ！きり丸。」

「はいっ！」

土井ときり丸は頷き合うと去っていった。

「きり丸君と土井先生って親子みたいですねぇ。」

18「おかえり」。入門表にサインしてください。」（後書き）

拙い文章で申し訳ありません！

同時に読んでいただき、ありがとうございます！

19「こんな幸せそうに寝ているのが悪い。」

医務室の新野の元に結を置いてきた立花は学園長の庵へと足を運んでいた。

「学園長先生。」

「おお。六年い組の立花か。」

「裏裏裏山で倒れていた男がこのような書状を持っておりました。」

「フム。」

学園長はへムへムと打っていた囲碁版から目を上げ、立花から書状を受け取り、目を通した。

「何々……。戸部新左エ門からワシ宛の書状か……。」

一度開け一通り目を通し、元に戻した。

「……。にして、この男はどこへ。」

「意識がなく、怪我をしていたようでしたので医務室へ連れて行きました。」

「フム。そうか。これは怪しいものではないぞ。仙蔵。意識が戻ったらワシの所へ来るように伝えてくれ。」

「はっ御意。」

スー。

立花は医務室の戸を開けた。

中には噂の布団に横たわった男と忍術学園校医の新野がいる。

「立花君。学園長先生はなんと行ってましたか？」

「怪しい者ではないので、目覚め次第、庵の方に来るようにこのことです。」

「そうですか・・・。」

「新野先生。学園長先生は怪しい者ではないと言っておきながら、なぜこれの正体を教えてくださらなかったのでしょうか？」

（学園長はなぜ私にこれの正体を教えなかったのか？

そんなに信用が置けないのか？

それとも、未熟者と言いたいのか？）

新野が口を開いた。

「立花君。考えすぎることないと思います。」

私には学園長先生の思いつきと言う怪しい匂いしか感じない気がします。」

「・・・それもそうかもしれません。」

「彼の傷は顔や手などの露出した部分にできた擦り傷と、足の捻挫くらいです。」

気を失っているというより、熟睡しています。

学園長先生の所に行くことは私から直接本人に言うておきますから。立花君。キミは部屋で休んできなさい。」

立花が結に目を向けるとそれはそれは幸せそうにスーと寝息を立てながら寝ていた。

(・・・。腹が立つ。)

「ありがとうございます。ですが、実習の途中で抜け出して来てしまったのすぐに戻る必要がありますからそういう訳にはいきません。」

「立花君。このままで実習に向かってもいい演習ができませんよ。半時ほどでもいいから休んでいきなさい。」

実習中に抜けた理由と少し遅くなる旨はへムへムに一足先に伝えるよう頼んでおきますから。」

「・・・はい。分かりました。そうさせていただきます。」

立花は新野に答えると、結の枕元に書状を置く。

そのまま、結のオデコにその白く繊細そうな指を一本突き立てるとツンツと突いた。

結の顔が歪む。

人が福富しんべエと山村喜三太で苦勞しているにも関わらず、こんな幸せそうに寝ているのが悪い。

今度は両頬を摘む。

たてに伸ばす。

「・・・びえ・・・。」

もう一度たて。

「・・・ぎゃ・・・。」

今度はよこ。

「・・・めえ・・・。」

もう一回よこ。

「・・・でえ・・・。」

丸書いてチョン。

「ギャアアアア!・・・でででで・・・。」

チョンで思いっきり伸ばして放したのが効いたらしく、頬をさすっている。目尻には薄っすら涙が溜まっている所を見ると本当に痛かったらしい。

当然だ。

「それでは、新野先生。失礼します。」
医務室を出て行った。

「立花君……。」

鬱憤が晴れたのか随分爽やかな顔をしていましたね。」

19「こんな幸せそうに寝ているのが悪い。」（後書き）

拙い文章で申し訳ありません！

同時に読んでいただき、ありがとうございます！

20「うちの結、来てませんか!!」

「立花君……。」

鬱憤が晴れたのか随分爽やかな顔をしていましたね。」

タタタタタタッ

「また誰か来たようですね……。」

スッパッーン!!!!

医務室の扉が大きく開かれた。

「新野先生!! うちの結、来てませんか!!」

「結太郎さん。居ないっすか!？」

「おや土井先生にきり丸君。この方ことでしょうか？」

新野の指した方向には間違えなく結が寝ていた。

「新野先生! 結は大丈夫なんでしょうか? どこが大きい怪我とかは?」

「結太郎さん大丈夫じゃないとオレのアルバイトが・・・!!」

ゴン

土井の拳骨がきり丸の頭におろされる。

「って何するんっスか!!」

「人の怪我を心配するのに金と結びつけるな!!!」

「…………。土井先生。落ちついてください。

擦り傷と捻挫程度ですので、大丈夫ですよ。

それに今は気絶というより、眠っているといった方がいいと思います。」

「そうですか…………。よかった…………。」

土井の顔の強張った顔が一気に崩れ、彼の傍に行き、頭を撫ぜた。

モゾモゾモゾ

結が布団の中で動く。

ポリポリポリポリ

結が指で顔を掻く。

「ふぁゝ。スー。」

「結起きろ?」

反応なし。

「起きろ。結。」

「……だからあ。……いやだって……言ってるでしょお!!」

ピキ。

一度は安心したが、その無神経に寝て、寝言を返してきた結の寝顔を見てイライラしてきた。

「ばかもーん!!!! いい加減起きなさい!!!!」

また私。何故か座らされて説教タイムになっています。

何で私怒られてるのでしょうか？

しかも、ここどこ？

20「うちの結、来てませんか!!」 (後書き)

拙い文章で申し訳ありません!!

同時に読んでいただき、ありがとうございます!

21「そうさ 100%勇気 もうがんばるしかないさ」

やはり、長廊下を歩いて向かう庵はどこかで見たことがある気がした。

学園長先生の前に土井さんと一緒に座っています。

学園長先生は白髪のおかっぱ頭で赤いチャンチャンコを着ており、背は低め。

どうやら、話を聞くとところによると、ずいぶんな凄腕忍者だったらしい。

自慢話を聞くと、ますますこの人知ってる気がする。

どこかで、お会いしたことありませんか？

頭のすぐそこまで、答えが出てきているのに最後の一步で思い浮かばない。

トントントン

「誰じゃ。」

「へムへム。」

?????????へムへム・?????

「入れ。」

「へム」

ガラ。

「おお。お茶とは気が利くのう。」

.....。

思い出した.....。

へム。へム。へムへム〜♪

へム。へム。へムエム♪

→こんなのがあった気がする・・・。

あと、最後の落ちで

「へムへムへムへムへムッ!!」と笑うところ。

私のお肌がまだピチピチのころ（幼少期）、夕方N○K教育番組でよく見てた『忍たま乱太郎』の世界じゃあないのよ。道理で、アルバイトやらの横文字が出てくるわけだ。

正直、『忍たま乱太郎』の記憶なんてあやふやしかない。

知っているのは給食のおばちゃん、違った食堂のおばちゃん。

学園長。へムへム。乱太郎。きり丸。しんべエ。山田先生。土井先生。

はい、以上終わり。

わあああああああ。

きり丸ってあの（・・）きり丸だったんだ!!

それに土井さんって土井先生!!!!

その優しさと包容力で、何人の少女のハートを仕留めたか!!

わたし? ああ、あんな先生いいなあってもちろん憧れたよ。

あと、今の私にピッタリの曲。

えっとなんだっけ?

チャーンチャ。チャーチャー。チャーーン。チャッチャッチャッ! がっかりして めめめそして どうしたんだい

太陽みたいに笑う きみはどこだい

Wow Wow やりたいこと やったもん勝ち 青春なら
つらいときはいつだって そばにいるから

夢はでかくなけりゃ つまらないだろう

胸をたたいて 冒険しよう

そうさ 100%勇気 もうがんばるしかないさ

この世界中の元気 抱きしめながら

そうさ 100%勇気 もうやりきるしかないさ

ぼくたちが持てる輝き 永遠に忘れないでね

ぶつかったり 傷ついたり すればいいさ

ハートが燃えているなら 後悔しない

Wow Wow じっとしてちゃ はじまらない このときめき

きみと追いかけてゆける 風が好きだよ

昨日飛べなかった 空があるなら

いまあるチャンス つかんでみよう

そうさ 100%勇気 さあ飛び込むしかないさ

まだ涙だけで終わる ときじゃないだろう

そうさ 100%勇気 もうふりむいちゃいけない

ぼくたちはぼくたちらしく どこまでも駆けてゆくのだ

たとえさみしすぎる 夜がきたって

新しい朝 かならずくるさ

そうさ 100%勇気 もうがんばるしかないさ

この世界中の元気 抱きしめながら

そうさ 100%勇気 もうやりきるしかないさ

ぼくたちが持てる輝き 永遠に忘れないでね

チャーンチャ。チャッチャッチャッ。

21「そうさ 100%勇気 もうがんばるしかないさ」(後書き)

いったん切ります。

また、明日の同じ時間に掲載します。

拙い文章で申し訳ありません!!

同時に読んでいただき、ありがとうございます!

22「いえいえ。学園長先生ほどでは・・・。」

「おい！結大丈夫か？」

約10数年前、憧れだった土井先生が私を呼んでる・・・。

えっと目の前に学園長。

はい。私、やっと現実に戻ってきました。

「フム。で・・・お主は？」

私はキリツと学園長の眼を正面から見つめた。

ピリ。

学園長から殺気が飛んでくる。

ジト。

いやな汗が手のひらを湿らせる。

気迫が只者じゃない・・・。

ウソはつけない。

野生の勘がそう私に告げた。

私はその瞳から眼をそらすと畳に手を付き、お辞儀をした。

「お初にお目にかかります。学園長先生。

私は時内結と申します。」

「結太郎！！」

本名を言ってしまった結に土井が声をあげる。

「土井先生。いいんです。」

結が制止をかける。

「書状を戸部先生よりお預かりしております。」

学園長は先ほど立花に渡されたものであったが、それに眼を通すふ

りをして、目の前の人物を観察した。

そして、表情を変えた。

「何故におぬしは男装をしているのじゃ？」

結は眼を見開いた。

（アニメの中ではタダのワガママジーさんで困ったお人のイメージがあったが、そういう訳ではなさそうか。

忍者現役を引退しても、その嗅覚は衰えていないのか・・・）

結はフツと顔の筋肉を緩めた。

「よく分かりましたね。」

「ズー。女子にしかみえぬぞ。」

お茶をすすりながら学園長が答ええる。

「そうですね。なかなかばれない方なんです。私、未来から来たんです。」

近所から来ました。みたいのノリで結が言った。

（結！！そんなことを言ったら、いくら学園長でも・・・。信じないぞ！！！！）

話に割り込むにも割り込めない土井は胃をキリキリさせながら心の中で言う。

学園長が眼を細めた。

「ホウ。興味深いの・・・。証明できるのか？」

「はい。もちろんです。」

ススースと学園長に近づくと、

結が懐から、こちらに来た日に持っていた品の一つの四角い板のようなものを出した。

「それはなんじゃ？」

「未来の物でございます。」

結が四角いものすなわちiP h o n eのスイッチを入れた。

結が次々と操作していく様子に学園長は目輝かせて居ていく。

「このゲームとかどうでしょう？」

インターネット関係の回線や電話の回線を利用するメール、電話、インターネット、YouTube等は使えなかったが幸いなことにアプリゲームが使えた。それに時が止まっているせいか電池はなくならない。

学園長先生にはダウンロードしてあった将棋ゲームのやり方を教えて渡した。

「結。こんなものを持っているとは、おぬしもやるのう。」

「いえいえ。学園長先生ほどでは・・・。」

悪代官と商人のような会話をして、波長が合うのかノリノリの二人であった。

（私がキリキリ胃を痛めてまで心配したのに・・・。）
後ろにはゲッソリした土井がいた。

「学園長先生。私はここで臨時で雇っていただけなのですか？」

「もちろんじゃ。学園に害をもたらすヤツではなさそうじゃ。なあへムへム？」

「へムッ！」

「よかったな。結。」

土井が結の頭の手をのせる。

「はい！土井先生。ありがとうございます！」

学園長先生。とりあえず私の設定は、書面にも書かれている通り名前じないゆうたろう前は時内結太郎。

歳は15でO型の天秤座。背がもっと大きくなったらという密かな願望を持つ男で、土井先生の遠い親戚ということをお願いします。」

「フム・・・。！！！！！！」

ピッカーンッ！！

学園長の頭の上で電球が光った。

「面白いことを思いついたぞ！！」

「ゲッ……。学園長先生の迷惑な思いつき……。」

土井先生が呟く。

「？」

結が首を傾げる。

「結。学園長先生の思いつきはほとんどが迷惑で学園全体が被害を被ることがほとんどなんだっ！！」

土井は結の肩をガバツと掴んで言った。

「結太郎を女だと早く分かった上位5人の生徒・教職員に褒美を取らせる！！」

土井がバツと学園長の服を掴む。

「ッそれだけは！！辞めてください！！結が襲われたらどうしてくれるんですかっ！！」

「半助が守ってやればよからう。どうじゃ？結太郎。」

「それ、面白そうですねv v v。」

何人分かりますかね？なかなかばれないと思いますけどね。」

「結もノルなああ！！！」

土井が思いつきつつこむ。

「景品は何がいいかの？」

「うーん……。」

「ワシのストラップとかどうじゃ！？」

「イイと思いますが、もっと豪華な方が……。」

休暇一週間とかどうですか？」

「じゃあ決まりじゃ！半助！景品はワシのストラップと休暇1週間じゃ。」

「ストラップははずさないんか！！！」
「またもや土井の鋭いつっこみ。」

そんなこんなで、部屋は土井先生と山田先生の部屋の隣の職員寮の一番端の空き部屋になり、お風呂はくのたまの風呂ではなく、忍たまの風呂を使うこととなった。

22「いえいえ。学園長先生ほどでは・・・。」（後書き）

<おまけ1>

「土井センセ!!! 気にすることないですよ!!」
「なかなかばれませんって!」

「一応、みな忍びなんだぞ・・・。そういう臭覚は効くんだ。」

「じゃあ。半助兄さんが守ってください!」

「（／／／。／／／）あのなあ・・・。そう言う問題ではなくて・・・。」

上目使いで下から見上げる結に思わず、可愛いと感じてしまった土井でした。

<おまけ2>

「なんで土井さんって呼ばなくなったんだ。」

「え・・・だって。土井先生のほうが親しみが湧くし。」

（幼少期の憧れ先生を先生って呼んじゃいけない?）

生徒の前で、土井さんって言う訳にいかないでしょ?」

「そうだよな・・・。」

どうせ・・・。私は先生としか認識されていないんだ・・・。
ブツブツブツ・・・。

「そんなに気に入らないなら言い直す?」

半助さん、土井ちゃん、半助、兄上、半ちゃんどれがお好み?」

「・・・・・・・・。いい土井先生で。」

「そう。じゃあ土井センセ！」

一体、土井先生は結に何と呼ばせたかったのだろうか？

B V 森実

拙い文章で申し訳ありません！！

同時に読んでいただき、ありがとうございます！

『玉手箱』の方に『忍者の学園』の番外編を付け足しました。
よかったら、見てやってください。

23 「二期一会。雫（キミ）に出会えて ハ」（前書き）

玉手箱から移動させました。

ンだ。

で、避ける。

私に避けられた大玉は案の定、私の斜め後ろにあった木にぶつかり止った。

荷物の中身を見てみると案の定グチャグチャ。

思わず引きつった笑みが私の顔に浮かんだ。

「小松田さん……」

「はあいっ!!ごめんなさい。」

「もういいよ……。運ぶの私がするから、場所取りしてて。」

ということで、

裏裏裏山の花見会場のとてもいい場所に陣取った私はそこに小松田さんを座らせた。

「いい？小松田さん。余計なこととはしなくていいから、この場所に座っていてね。絶対動いちゃダメだからね。」

「はいっ……」

シュンとなってしまった小松田さんを見て少し可哀想なことをしたかなっと思いつつも、

あのグチャグチャに崩れてしまったご馳走に変身するであろう食材たちを思いだし甘やかしたらこの子（↑小松田さん？ B V森実）は育たないと私は頭を振った。

そんな訳で、この時内結太郎 2回目の食料その他を運んでいる最中ってことです。

ああ言い忘れていましたが、花見会場の桜はとっても綺麗で、真っ青な空と淡いピンクのコントラスト絶妙で思わず目が奪われてしまいました。明後日行なわれる夜ザクラ花見大会はさぞ幻想的で素晴

らしいことでしょう。

ズズズズズズ・・・。

うおヨダレが。

今のは、幻想的なサクラの世界に対してのヨダレですからね！団子やおばちゃんの料理にじゃないですよ！！

それで、冒頭に戻るわけです。

「まったく何で私がこんな重いモノ、運ばなきゃいけないのさ。これでもうら若い乙女だつうの！！」

つぶやいても、いいことってないですよ？

ああーなんか、気持ちが落ち込んで辛くなってきた。

ポツ。

ポツ。

ポツ。

ポツ。

ポツ。

ポツ。

ポツ。

おやおや、今度は雨まで降ってきましたよ。
トホホホ・・・。

ポツ

。

ポツ

。

・

ポツ

・

。

ポツ

・

ポツ

。

ボツ

「ゲッ。しかも大粒になってきたし・・・。
 なんかとりあえず、雨宿りできる場所探さなきゃ。」

私は道を外れ、なるべく木の下を歩きながら雨宿りでできそうな場所を探し始めた。

「ないよな」。雨宿りできる場所……。

「おっ。あそこの岩肌が出てるとこ洞穴みたいなのかな・・・。」
私は、30メートルくらい先にみえた岩肌の壁のようになっている
方に向かっていった。

そこから、壁沿いに500メートルくらい行くと滝があり、そのすぐ傍の草むらの中に隠れている洞穴を発見した。

「ラッキーツ!!!」

私は疲れて老体に鞭打って、全力疾走で洞穴に入っていた。

「うわあ。ビシヨビシヨ……。ヘツクツシユン！！」

これじゃあ。風邪ひいちゃうよ・・・。」

キラーン！！

結の頭の中で電球が光る。

「伝子さんの夜桜の余興用の小袖があつたはず……。」

風呂敷をほどいて、結は中身をゴソゴソした。

「結構色々入ってるじゃないの・・・。」

これは重いわけだな．．．。がんばった私！！

おっ。あつた。サスガ伝子さん・。わたしが絶対着ないような柄です!! 派手で女らしすぎます!!

まあ、私の趣味じゃないけど・・・背に腹は変えられないからな。風邪ひくよりはいいか・・・」

着ていた職員用の忍び装束を脱ぎ、伝子の着物を羽織った。

「おつきい……。しょうがないか。この分じゃしばらく外には出られないだろうから、火でも付けてこの濡れた着物を乾かすかな。」

ゴソ。

ガサ……。ガササ……。ゴソ。

ゴソ……。ガサ。

「……。うつ……。」

!!!!!!!!!!

……。うめき声？

23 「二期一会。雫（キミ）に出会えて ハ」（後書き）

拙い文章で申し訳ありません！

同時に読んでいただき、ありがとうございます！

ちなみにいうと題名のハは日本の音名のハニホヘトのハです。

24 「二期一会。雫（キミ）に出会えて 二」（前書き）

玉手箱から移動させてきました。

24「二期一会。雫（キミ）に出会えて ニ」

ゴソ。

ガサ・・・・ガササ・・・・ゴソ・

ゴソ・・・・ガサ。

「・・・うつ・・・。」

!!!!!!!!!!

・・・うめき声？

先ほどは自分の着物を着替えるのに夢中で何も考えなかったが、後ろをゆっくり振り返り、よくよく見ると後ろに広がった洞穴は得体の知れない怪物の口が「こっちゃん・こい。こっちゃんこい。」と手招きをしているように見えなくなかった。

お化けは怖い。

だけど、それは本当に私の前に現れた場合であって、実際に見えなきや信じません。

私こう見えても、現実主義者なんです！！（↑ウソツ！ B V森実）だから、絶対誰かいる・・・と思う。

わたしはうめき声をする方へとゆっくり歩を進めていった。

25メートルプールぐらい進んだろうか・・・。

そこは行き止まりになっており、人が岩にもたれ掛かって座っていた。

結が近づいていくが、荒い息が聞こえてくるだけで動く様子はない。

「あの。」

声を掛けてみるが私に対しての返答はない。

近寄って分かったが、しのび装束を着ている所を見ると間違えなく忍びなんだろう。

「ハアハア・・・・。うつ。ハア・・・・ハア・・・・ハア。」

暗くてよく見えなけど、この様子だと相当な怪我をしていることが

窺える。

よしっ。

ここは暗くて何も見えないから、とりあえず私の居たところまで運ぼう。

ズリズリズリ・・・。

さすがに、大の男の人を運べるだけの怪力は私にはないので、25メートルくらいだし我慢してもらって引きずった。

「すごい血・・・。」

明るいところに引きずって来て、その人を見ると体のそこらじゅうに血飛沫が飛び散っていた。思わず、私は目を見開く。

まだ私が15だったころ、

国を守るために立ちあがったあの時のあの人たちを思い浮かぶ。

『・・・なんで！！なんでなの？

だってさ・・・。みんなはこの国のことを考え、いいことしようと思ってるんでしょ？

何で、そんな真っ赤になってるの？

何で、動かなくなってるの？

可笑しいじゃない・・・そんなの。』

顔が強張り、手が震える。

「・・・くっ・・・。」

目の前の人がまた、うめき声をあげた。

私は頭を振って、思い出したことを頭の引き出しへと押し込めた。

今はそれどころじゃない。

この人のこと助けなきゃ。

気持ち落ち着けるため、深呼吸をする。
そして、自分の短刀を握り締めた。
私がんばるから、見ていてください。

結は両頬を

パンッ！ パンッ！

と叩く。

「よし！やるぞ。」

女らしからぬ気合の入れ方をして、目の前の人物に向き合った。
先日、大学で行なわれた救急救命法の授業を思い出す。

？ 意識の確認

まずは小さい声で肩口に膝をつき、肩を軽く叩きながら耳元で声を掛ける。

「あの、大丈夫ですか？」

だんだん声を大きくしていく。

「あの、大丈夫ですか？」

「あの、大丈夫ですか？」

・・・。

「反応なし。じゃあ次。」

？ 協力者を求める

意識のないときは、協力者を求め、119番通報とAEDの手配を依頼します。

「誰かあああ！！来てくださああい！！」シーン。

私の声がこの洞穴の中に共鳴するだけ。

「と言っても、誰もいないから無理・・・。119番もAEDもあたりまえだけじゃないし・・・。次にとばす。」

？ 気道確保

意識のないときは気道が塞がらない様に空気の通り道を確保します。

結は頭に巻かれていた頭巾をずらす。

「えっと……。片方の手で額を支え、他方の2本の指で、下あごを引き上げる。」

グキ。

「なんか音がしたようだったけど……。気にしない。気にしない。」

？ 呼吸の確認

目で胸・腹が動いているか、耳で呼吸音が聞こえるか、頬で息が感じられるか確認する。

「おお。動いてる！！まあ、うめき声が聞こえるんだから、当たり前？……。」

？ 外傷の確認

視診で全身を確認する。

結は血で染まったしのび装束に手を伸ばし調べた。

「……。ほとんどが返り血……。」

数箇所 of 打ち身、切り傷、擦り傷。

右の二の腕に結構深い切り傷。

そして、左足首の捻挫。

一体……。どなたにいたの？この人……。」

？ 応急処置

「まず、腕の深い傷の止血からだな。

これだけだと直接圧迫止血法だけじゃだめだな。傷口より心臓に近い部分を縛る血帯法を使わないと。」

結はとりあえず、縛るものを探した。

「縛るもの……。縛るもの……。」

あっそういえば、頭巾ってこう言うときに包帯とかの代わりで使うって言ってるの聞いたことあった！！」

結は早速、先ほど顔からずらした頭巾を彼の頭から取り、腕の付け

根に縛り、棒を使って止血帯を締めあげた。心臓より傷口の位置が高くなるように腕の下に荷物のクッションを置いた。

「さて、読者の皆さん。問題です。

止血帯法を用いた場合、一体どのくらいに時間の間隔で、帯を緩める必要があるでしょうか？

1、5分

2、30分

3、1時間

正解はCMのあと!!」

「焼酎が荷物の中に入っていたはず!!」

しんべエのパパがシャム（タイ）からの直輸入の焼酎を珍品として差し入れてくれたお酒、焼酎のことを思い出す。焼酎は16世紀ごろから、飲用としてだけでなく、消毒として用いられていた。しんべエのパパには悪いが、使わせてもらおう。ゴソゴソ。

「おお。あった・あった。」

焼酎を使って消毒し、荷物の中にあった清潔そうな食器用布巾を取り出し、直接傷口に当て、その上から手のひらで押さえた。

「直接圧迫止血法完了っ」と。

血がある程度止まるまではこのまま動けないので、30分に一回（正解は2番）止血帯を緩めながら、ちょっと頭の中を動かしてみる。「一体どこの忍者なんだろう？

まあ私には関係ないところだけど・・・。

興味ないし・・・。

にしても、まだ降っているよ、雨。

困るなあ。しかも、道忘れた・・・。

ホンモノの迷子になってしまった。

帰れないし……。絶望的だ!!!

私って、こんなに山道苦手だったっけ？

遭難してしまったけど、食料はあるし、なべもある。（↑食堂のお
ばちゃんがある場で調理するため）結構ラッキーかも。」

外でザーザーと降る雨を眺めた。

木々が風に揺られて激しく揺れる。

「嵐か。当分は外に出られないな……。」

「さてと、止まってきた感じだな。」

出血量が0になった訳ではないけど、このくらいなら包帯で巻けば
大丈夫な感じがする。

まったくもって勘だけだ。

もう1枚食器用の布巾を取り出すと木綿をあて替えた。

げっ。包帯がないじゃないの!!!

私が巻いているサラシならあるけど……。

ばっちいけど、背に腹は変えられないしな。

結は胸を潰すように何重にも巻かれた部分のサラシを緩め、その部
分のサラシを短刀で切った。

そしてそのサラシを傷口に当てた木綿の上から巻く。

「えっと。よく固定するためには富士山巻きすればいいんだっけ？」

（→いえ、違います。折り返し巻きです。B V森実）

うる覚えの記憶から引っぱり出し巻いてみた。

「うん。なかなかいいみたい……。」

思ったよりうまく巻けて結は大満足の様子だった。

24「二期一会。雫（キミ）に出会えて ニ」（後書き）

ちなみにいうと題名のニは日本の音名ハニホヘトのニです。

拙い文章で申し訳ありません!!

同時に読んでいただき、ありがとうございます!

25 「二期一会。雫（キミ）に出会えて ホ」（前書き）

玉手箱から移動させました。

25「二期一会。雫（キミ）に出会えて ホ」

「……くっ……。」

肩を引っ張られる痛みで諸泉は目を覚ました。

「すごい血……。」

頭の上の方から声がする。

誰かが私の腕の下に腕を通し、引きずって運んでいるらしい。
普段ならすぐにその腕から抜けて

クナイを首元へ突きつけるところなのだが、

敵の投げてきた手裏剣に塗られていた毒が効いており全身が動かない。
い。

敵に見つからないように、

見つけにくいこの草むらの中の洞穴に隠れたのに、
まさか誰か来るとは思わなかった。

不覚だった……。

しかし、不幸中の幸いか声だけ聞いた様子だと女か子どもだ。

それに私に意識があることを気付いている様子がない。

殺気や邪念の類も感じない。

とりあえずこのまま少し様子を見ることにしよう。

すると、それは叫んだり、

ブツブツ呟いたりしながら私に応急処置をし始めた。

途中、

「誰かあああ！！来てくださああい！！」と叫んでいたたり、

「えっと……。片方の手で額を支え、

他方の2本の指で、下あごを引き上げる。」

と思いつきり私のあごを持ち上げて首が妖しい音をたてた時には意識のあることに気付いてほしかった。

たどたどしくはあったが、適切に消毒し、懸命に処置を行なっている様子が見られ、敵ではないのではないかと感じた。

しかし、まだ油断は禁物だと思う。

処置に一段落ついたのか、敵のクイナがあたった部分に手を添えて布で押さえながら、今度はブツブツ独り言を言い出した。

「一体どこの忍者なんだろう？」
やはり……。何を探ろうと？

動かない手を自然な感じで動かない手を無理やり、懐のクナイへと向かわせる。

「まあ私には関係ないところだけど……。興味ないし……。にしても、まだ降っているよ、雨。困るなあ。

しかも、道忘れた……。

ホンモノの迷子になってしまった。

帰れないし……。絶望的だ！！！！

私って、こんなに山道苦手だったっけ？

遭難してしまったけど、食料はあるし、なべもある。結構ラッキーかも。」

興味ないか・・・。

胸元に必死で持っていた手がバカバカしく思え、動かすのをやめた。

一体なんの目的があって私を助けてるのか・・・。

私はうつすら、気付かれない程度に目を開けた。

私の傷口を押さえていたのは特別美人とはいえない普通の街娘のような女だった。

髪は外の雨のせいなのかで濡れている。

歳は断定しにくい。

恥ずかしげもなく、急に叫んだり騒いだりするところは10の少女の様。

物思いにふける様子は甘いも辛いも知った老成した老女の様。

着物の色が妙に派手で彼女と不釣り合いな感じがしたのは記憶に新しい。

外でザーザーと降る雨を女は眺めていた。

洞穴の外は木々が風に揺られて激しく揺れる。

「嵐か。当分は外に出られないな・・・。」

「さてと、止まってきた感じだな。」

すると、急に目の前の女は顔を近づけてきた。

「うん。寝てるね・・」
「いや、寝てないが・・」

女は私に背を向けると着物の上を肌蹴させ脱いだ。

脱いだ!!!!？

ツ何やってるんだっ！！

「♪♪♪♪。だけれども居ないからOKね！！！」

背中には何故か広い範囲にサラシが巻かれていた。
サラシ？

なぜ？怪我でもしているのか？

すると、今度はそのサラシをはずしだした。

私は思わず顔を赤らめ、光景から目をそらした。
スルスルスル。

「こんなもんで足りるかな？」

女はそう言う、途中でサラシを

小太刀よりも短い短刀で切るとこれ以上とけないように固定した。
 つ決して、全部解けばいいとか、残念だとかおもっていないからな
 っ！！

すると女は私の方を振り向き、

木綿の布を充てただけになっていた私の腕に

切り離したサラシをきつめに巻いた。

女は脱いだ上半身の小袖を羽織り直してはいたが、前の合わせをきちんとそろえている訳ではないので、サラシが見えてしまう。

私の方にサラシを巻こうとしやがんだ時

見えた胸の谷間が思ったより深かったことに驚く。

「うん。なかなかいいみたい・・・。」
思ったよりうまく巻けたのか女は機嫌がよさそうなの様子だ。

「こんな所に怪我人を寝かせておく訳にもいかないよな・・・。」
「ん？どうしようか・・・。」

しばらく考えているようであつたが、
急に、女は何か考え付いたのか、
ハッと顔をあげポンツと手を合わせた。

「花見の敷き物があるじゃん!!」
後ろの大荷物の方に行くとゴソゴソしだす。

「あつた、あつた・・・。」

また、ズリズリ・・・。ズルズル・・・。と運ばれ、
先ほど女が出した敷き物の上に転がされた。

「おっと。手が滑った!!大丈夫・・・?」

まあいいか・・・。ちゃんと、敷き物の上に転がったし。
痛ッ。

まあ、よくない!!!!!!

もう少し・・・。優しくできないものか・・・。

後少しでも、毒が抜ければ、動けるのだが。

パサッ。

掛け布団が私の上に掛けられる。

スッと私の頭の下に手が入り、

持ち上げられ、布を丸めたものを入れられた。

?・・・枕か・・・。

すると、心地よい声が聞こえてきた。

「おやすみ。手当てお疲れ様。よく休んでね。」
その声に誘われるようにして、意識が遠のいた。

25「二期一会。雫（キミ）に出会えて ホ」（後書き）

拙い文章で申し訳ありません！

同時に読んでいただき、ありがとうございます！

ちなみにいうと題名のホは日本の音名のハニホヘトのホです。

26 「二期一会。雫（キミ）に出会えて へ」（前書き）

玉手箱から移動させました。

26「二期一会。雫（キミ）に出会えてへ」

諸泉が眠りに落ちている間、

普段面倒くさがりの結は本当に良くがんばった。

まず、小枝、枯葉、石、集めから始まって・・・。

「結ちゃんの3分間クッキング。

チャラ。チャッチャッチャッ。

チャラ。チャッチャッチャッ。

チャラ。チャッチャッチャッチャッ。

チャリラリラン。

愛は食卓にある。

キュー〇ーの提供でお送りいたします。

<<中略>>

チャラ。チャッチャッチャッ。

チャラ。チャッチャッチャッ。

チャラ。チャッチャッチャッチャッ！！！！」

結はにゅいっと懷から小平太ギニョールを取り出した。

左手の小平太ギニョールことオソマツくん（↑違った・・・。）ナ
ナマツくんが元気に登場。

「てれびのまえのみなさんこんにちは！

ちでは、かいてきか？

きゅー〇ー3ぷん くつきんぐのじかんだぞ！」

どこか違う方に向かって説明していたナナマツくんは
私の方に振り返って本題に入りやすく促す。

「きょうははせんせつ。センセツ。

どんなクッキングするんだ？」

当然、番組の前の重労働の準備と

打ち合わせで料理名を知っているはずなんだけど

、ちゃんと尋ねるナナマツくんはかわいらしい。

「今日は、いつもとちよつと違うものに挑戦してみましよう！ほとんど物ない洞穴でお粥を作ります。」

「それはたのしみだな！！」

カブトムシを見つけた少年のようにワクワクした声をだすナナマツくん。

「材料は、クナイと石と小枝・枯葉と火打石そして水と糲と梅干。」

「センス！クナイなんてなんにつかうんだ！！」

忍たまのナナマツくんが知らないわけないのに、そこで先生を立てるキミはえらい。

「お粥を作るにはお湯が必要です。お湯を沸かすにはまず、かまどを作らなくてはいけません。そこで、かまどを作るときの土を掘るのに使います。」

「なるほどな！！」

クイズ番組の正解が出たときの様にナナマツくんが驚いてくれた。反応が良い。

「それでは、かまど作りから始めてみましょう。

湿気によって熱を奪われるのを防ぐため、

火床となる地面は乾燥した場所を選択します。

乾いた地面がない場合は少し掘りましょう。

乾いた地面が出てきます。

大きめの石を河原などから拾い集め、

風上を除く3面になるべく水平に組んでいきます。

バランスをとるためと熱効率を上げるために、

石と石との間にさらに小石を挟むのがポイントです。」

「なかなかたいへんなしごとだな。」

心配そうなナナマツくん。

「そうですね。みんなでワイワイしながら準備することで楽しくなりますよ。」

そして、私がクナイを持ち、出口付近の地面を少し掘ろうとしたら、
「こっちに、もうセツトしてあるぞ！」

用意周到なアシスタントを持った私って幸せ！

「次にかまどの中心に、着火材として半紙などを適当に丸めて置きます。」

そして、洞穴の中から集めた、なるべく乾燥した小枝や枯れ葉、木の皮などを乗せ、その上に細めの薪を置く。」

「はい！はい！はいっ！はい！」

センセ！これでいいか？」

ナナマツくんがかまどいっぱいに集めてきたものを詰めてくれた。

「ナナマツくん。いっぱい入れれば良いって訳ではないのですよ。程良く空気が送り込まれるよう、あまり詰め込みすぎないこともポイントです。」

「へえ。知らなかったな。」

反応が良いナナマツくん思わず、笑みがこぼれそうになる。私は表情を押さえて、続ける。

「いよいよ半紙に着火します。」

火打石で火をおこし、＜パチパチツ＞と

薪がはぜる音がしはじめたら着火成功です。

さらに大きめの薪をくべて火を安定させましょう。」

「次に、^{ほしご}糲を使ったお粥の作り方です。

まず、お湯を沸かします。」

私が、鍋を持って外の滝に水を汲みに行こうとすると、

「もう湯、わかしてあるからな。センセ！」

おお、3分間クッキングならではのスキップ。

「お湯160gに対し干し飯100gを鍋に入れ、煮ます。」

26 「二期一会。雫（キミ）に出会えて　へ」（後書き）

拙い文章で申し訳ありません！

同時に読んでいただき、ありがとうございます！

ちなみにいうと題名のへは日本の音名のハニホヘトのへです。

27 「二期一会。雫（キミ）に出会えて ト」（前書き）

玉手箱から移動させました。

27「二期一会。雫（キミ）に出会えて ト」

「つッ・・・。」

目を開けると・・・

ごつごつとした威圧感のある岩肌が天井を覆っている。

辺りを見回すと、

出入り口の方では日が落ちかけていた。

聞こえる雨音から先ほどよりは雨足が弱くなって来ているように感じる。

スー。

・・・ん？。

近くから寝息が聞こえた。

敵っ！？

「くっ・・・。」

まだ、つぶっていたい目をこじ開け、

抜けきらない毒によって

痺れている身体を無理やり起こす。

すると、先ほどの女が私の寝ている敷布の隣の岩にもたれ掛かって寝ていた。

何をしているんだ。この女は・・・。

まぬけな顔をして口を開けて寝ている。

「あの・・・。」

スーッ。

反応なし。

今度は女の肩を揺らしながら、もう一度声を掛けてみた。

「あの・・・すみません。起きてください。」

「あっ・・・だめっ!!」

はあ????????

「やめてえ・・・あっ・・・。」

／／／

思わず、手を引っ込める。

「私が・・・」

タイムセールでやっと手に入れたオオトロ。

返してよおおおお!! おばちゃあああん!!

なんなんだ・・・。

一体どんな夢の中にいるのかと思って、
手を止めてみれば。

タイムセール・・・。

おい。

歳若い女としてどうだ？

今の主婦の叫びだと思うのは私だけか？

とりあえず、起きてくれ・・・。

もう一度、肩を揺らした。

「あの。そろそろ起きてください。」

「いやだ・・・。」

いやだあ!？

なぜ、私がそんなこと言われなきゃいけない？
組頭でもないヤツから。

「いや、じゃありません!!

起きてください!!」

なんか、調子が狂う。

思わず、強めに肩を揺すってしまった。

!!!!

ボフツ。

女が岩からズレ落ち地面に頭をぶつける。

「痛っ・・・・。」

起きたか？

すると、手だけを伸ばして周りを探り出した。

女は私の膝を見つけると、

モゾモゾと体を動かして頭をそこに乗せた。

はああ？

「なんなんだ!!!!」

先ほどこから、

外れ続けている自分の予想に忍者としての自信をなくしそうになる。

一体私は・・・。

思わず、目をつぶり、眉間を押さえた。

ゴンッ

「痛っ!!」

膝に乗っていたはずの頭によってアッパーを食らわせられた。

何なのだ!!!

さっきから!!

文句の一つも二つも言ってやろうと

私は顎を押さえながら勢いよく起き上がった。

すると急にニユイツとあの女のドアップが現れた。

「起きた? 大丈夫?」

「あのですねえ・・・。」

それだけなら文句言ってやろうと思ったあのだが、

私が目を向けた先にいた彼女の顔は、

心配するような顔で私をみて歪めれていた。

何なのだ!!! ホントに!!!!

あと5寸もないくらいの距離にハッと気付き、
思わず少し離れる。

!!!

（／／／／／）

「？」

女は一度首を傾げたが

「で、痛くない？」

と、もう一度尋ねてきた。

「・・・はい。」

すると、目の前の女はパッと顔を輝かせて、
また顔を近づけてきた。

「よかった！おはよう。」

（っだから！近い！）

「はあ。」

顔を逸らすことに夢中で、
思わず気の抜けたような返事になってしまった。
すると少し怒ったような顔をして、
片方の頬を掴んできた。

「ッへえた・・・。」

「人がおはようって挨拶してんだから、
返事しようよ、ネ？」

よくわからない・・・。

毒による痺れは少し取れてきたし、
このくらいの傷も日常茶飯事のことだから
言われたとおり挨拶をしようと思って
姿勢を変えようとして立ち上がろうとした。

「あわわわあわわ!! いいから、起き上がらなくて! 傷に響くだろうから、無理しなんだよ!!!」

すると、今度はすごく慌てながら

私をガバツと止めて、私を抑えていた。

いったい何なんだ!!

挨拶しろと言ってみたり、

起き上がるなど言ってみたり

どっちなんだ!!

女に抑えられたままではしょうがないので、
とりあえずそのまま挨拶する。

「おはようございます・・・。」

すると今度は表情がパツと輝く。

「おはようございます!」

と女は挨拶を返した。

調子が狂う。

顔近っ!!

(／／／／／)

いつもなら、このくらいのこと
平然とかわす事ができるのに、
その不意うちの笑顔に思わず、
頭が真っ白になってしまった。

先ほどまで、歪めていた顔をどこに行ったのか？
とりあえず、看病をしてもらったことにお礼をいうことにする。
「世話をかけたようですね。すみませんでした。」

女は目を真ん丸くして、私の顔を覗き込んだ。

「すみませんでしたじゃないでしょ？」

だって、目の前でさ。死にそうな人いたら、
助けるんだって当たり前！！」

！？

何なんだ！

この女は！！！！

戦国の下剋上の世界において、

まず自分の命を第一にすることが必須。

忍者とはスパイと同義語である。

よって、一般人が忍者に関われば消される可能性もある。
当然、自分の命を守るため、接触を避けるはずであった。
それなのにこの女は助けるのが当たり前だと、
まるで1足す1が2になるごとく、

当然のことのように

『だって、目の前でさ。死にそうな人いたら、
助けるんだって当たり前！！』と言い切った。

当たり前じゃないだろ！！

無視して、ほっとけばいいじゃないか！！

そうなんとも言いようのない感情に襲われた私は

目の前のその女を睨みつけた。

すると、女は真っ直ぐ私の瞳をただ見つめた。

そして、一瞬深みを帯び、伏せられた。

「キレイごとと言ってと思ったでしょ？」

「……………」

「そう。これは所詮キレイごと……………」

でも、そう願って助けたっていいと思わない？」

「……………」

「私も、大切な人が助けられなかったことあった。

でも、そこで立ち止まってしまったら……………」

道を歩むのを止めてしまったら……………」

その人、悲しがると思うんだ……………」

だって、私だってそう思うから。

生きてがんばってほしいって思うから。

これ、普通でしょ？

あなたにだって、

あなたのことを大切に思う人いるでしょ？

その人を泣かせたくない……………」

だって、悲しくって、寂しいって知っているから。

なんかクサクなっちゃったね。」

「・・・。」

私の目は真っ直ぐその透き通る瞳に捕えられた。
私の中に彼女の言葉が、
そのままストンと落ちてくる。

私の中に水紋が広がるが如くに何かが広がった。

ああそうか・・・。

彼女は違うんだ。

彼女は忍者ではない。

そして、一般人でもない。

まるで、彼女の存在自体が異質で
ここにあってはならないもののように感じた。

そして、シャボンように
いつかは消えてしまう気がした。

27 「二期一会。雫（キミ）に出会えて ト」（後書き）

拙い文章で申し訳ありません！

同時に読んでいただき、ありがとうございます！

ちなみにいうと題名のトは日本の音名のハニホヘトのトです。

28 「二期一会。雫（キミ）に出会えて イ」（前書き）

玉手箱から移動させてきました。

28「二期一会。雫（キミ）に出会えて イ」

ああそうか・・・。

彼女は違うんだ。

彼女は忍者ではない。

そして、一般人でもない。

まるで、彼女の存在自体が異質でここにあってはならないもののように感じた。

そして、シャボンのようにいつかは消えてしまう気がした。

私もう一度、起き上がろうとすると彼女は止めようとする。

私はそれを断り、起き上がった。

肩の力をぬいて、彼女にお礼を言う。

「ありがとうございます。」

すると、うれしそうな顔をして答える。

「どういたしまして。」

そして、こちらからもありがとう！

なぜ、あなたがそれを言うのだろう？
本当におかしな人だ。

「何故あなたが、私にお礼を言うのですか？
私は何もしていませんが……。」

私は眉を潜めながら言う。

すると、恥ずかしそうに彼女は
頭を掻くという少年らしい仕草をしながら答えた。

「いやあゝ。言い難いんだけど。

完璧に遭難だったから。

きもち寂しかったというかなんというか……。
それに余分なこと、考えなくてもすんだし……。
2人だったから、心強かったし……。」

自分が不安だとか、寂しいとか
素直に口で表現するのを

恥ずかしがっている様子が微笑ましく感じ、
つい、微笑んでしまった。

「あ！今。ダッサッ（↑死語？）と思ったでしょ？」
彼女が顔を少し染めながら、キッと睨みつけてきた。

「いえ。そんなことないです。」

思わず、首を左右に振る。

「うっそだあ。」

「うっそだあって……。」

そんなことで、むきにならなくても……。

「よく言うよ・・・」

笑ってた癖してさ・・・

まあいいや。」

「そういえば名前言ってなかったね。

私の名前は。」

彼女はそういつて、口をつぐんだ。

そして、イタズラ小僧のような顔をした彼女は
目をキラキラさせながら口を開く。

「い・い・こ・と・考・え・た・！・！

キミさ。私の名前考えてよ！

私、キミの名前考えるから。

だって、忍者はそう簡単に名前教えないんでしょ？
だったら、最初から2人で呼ぶ名前作っちゃえば
そんなの関係ねえ！って感じだと思わない！？
しかも、面白い。」

そういうと、彼女は頭を抱えだして、
真剣に考え始めた。

「うーん。俳優の名前使うのもイイし・・・。

あと、動物・・・？うーん。」

悩んでいる・・・。

すると急にガバツと顔をあげる。

「あっそうだ！

お粥作ったんだ。

とりあえず食べやすいように
梅干しか入れてないけど。

よかったら、食べて。」

彼女は私を近くの岩にもたれかけさせる。

そして、木や石を使って作られているかまどの方に行き、お粥をお椀に盛ると、蓮華と共に持ってきてくれた。

すると、彼女は私を眺めながらまた、真剣な目をして、また何やらブツブツ言い始める。

「あーでもない。こーでもない。
ブツブツブツ・・・。」

ちんぷく、まんぷく、
あっぺらこーの、きんぴらこー、
じょんがらびこたこ、
めっきら、もっきら、
どーん、どん。

もういいや。決めた。
ドンちゃんにする！！」

すると、私の目の前の病人（↑違った怪我人。）は興味を持ったのか、

真剣な眼差しを向けて尋ねてきた。

「先ほどのちんぷく、まんぷく・・・。にはどのような意味があるんですか？」

あまりに興味津々なので、
私もちよっと真面目に

ウンチク大好き少年な感じで答えてみる。

ないメガネをあげるような仕草も忘れない。

「これはですね。」

なかなか有名な話でして

福音館〇店から出版されています。

夏のある少年が体験した不思議な物語なのです。

主人公の少年カンタがいつもの遊び場の神社に行ったが、遊ぶヤツがだーれもない。

だから、しゃくだからカンタは

大声で歌ってやりました。

めっちゃくっちゃで、はっちゃめっちゃな歌を。

『ちんぷく、まんぷく、

あっぺらこーの、きんぴらこー、

じょんがらぴこたこ、

めっきら、もっきら、

どーん、どん。！！！！』

すると、どうでしょう？

大きな木の根と根の間にできた隙間から、
自分を呼ぶ声がするではありませんか！

覗いてみると、

『落ちる、落ちる、落ちる、落ちる……。』

吸い込まれるように隙間の中に落ちてしまいました。

気付くとカンタは

明かりに照らさせる

不思議な夜の森に立っていました。

以下省略。

っていう話のめちゃうちな歌の一部です。」
今、絶対面倒くさいという理由で端折った……。
顔に出ている。

私はジットとした目で彼女をみた。

「今、説明面倒くさいと思って端折りましたね。」

ギクツとした彼女は私に目を合わせない。

凶星なのだろう。

「……。どっドンちゃんに決定したんだから！」

ついには、話題を反らした。

「。。。。。」

何故、ドンちゃん？ カンタじゃないのか？

「今さあ。絶対センスないと思ったでしょ？」

ジトツとした目で私を見る。

「ついえ。そうなことないです！」

凶星に思わず必死になってしまう。

「ホントかなあ？」

今度は彼女の方がイジワルそうに聞いてきた。

ちょっと、話題をそらしてみる

「。。。シズクさん。」

彼女がきょとんとした表情で私を見た。

「へッ。キョロキョロ

。。。私のこと？」

あなたの存在が雨の後、葉の上を自由に動く、水の宝石のように見えたから。

「はい。雨の日に出会いましたから。」

結の周りの空気が一気に落ち込みモードに入る。

「なんか・・・」

自分のネーミングセンスのなさを

より強調される感じで、とてつもなくいや・・・。」

諸泉が真面目に尋ねた。

「じゃあ。アラシさん。」

嵐の日に出会いましたから。」

（ジャーンズかよっ！！！！）

「いや。ドンちゃん。」

「・・・いいよ。シズクで。」

すかさず、拒否する。

「じゃあ。シズクさん。」

28「二期一会。雫（キミ）に出会えて イ」（後書き）

ちなみにいうと題名のイは日本の音名ハニホヘトのイです。

拙い文章で申し訳ありません!!

同時に読んでいただき、ありがとうございます!

29 「二期一会。雫（キミ）に出会えて　ロ」

「うん。ところでさー。ドンちゃんって何歳？」
「19ですが。」

結は目を丸くて答える。

「えっ！！マジですか！！タメじゃん！！」

諸泉が首を傾げる。

「ため？・・・ですか。」

「うん。同じ年ってこと。私も19。」

「・・・。それ本当ですか？」

「本当です。餓鬼っぽいと思いましたね！！
まあいつものことですから。
それで、じゃあ何座？」

「天秤座です。」

「うお！同じ！ビンゴ！じゃあさあ。血液型は？」

「A型です。」

「チッ残念。私はO型だから。」

諸泉はお粥を食べ、

結はその辺の食材をつまみ食事を終え、
食後のお茶とお煎餅を食べながら雑談をした。

「シズクさん。」

なぜ、こんなに物があるんですか？ボリボリ。」

「いやー。話せば長くなるんだけど・・・。」

ウチの長の迷惑な思いつきで。

『ワシは良いことを思いついたぞ!!』

お主の歓迎花見大会をしようと思う!』

『うわぁ! いいですね。夜桜とかどうです?』

『そうじゃな! 職員だけで夜桜花見大会じゃ!』

『うお!! それってすごくないですかっ!!』

長がニヤリと意地悪そうな笑みを向けた。

『花見のセオリーを知ってるかのう?』

準備するのは誰じゃ?』

『知ってます!! 定番は新入社員順に場所取りと食事の運搬に準備を分担するんですね!!』

『正解じゃ!!』

『やったー!!』

・・・ちよつと待て・・・。

新入社員って・・・私かい!!』

『いかにもそうじゃ!! もうき・ま・り♪』

『ちよつと待ってくださああああ!!!!!!!!』

『待たん。頼んだぞ!! えいつ。』

そういつて私の方に何かを投げ、

発生した煙と共に消えていった。

『消えた・・・。』

・・・んなみたいな感じで、

この重い重い花見の準備がいっぱい詰まった荷物を

運んでいる最中に雨が振り出してね。

雨宿りできるところはないかと

道を外れて探していたらイイところ発見!!』

って感じなんだよ・・・。

それで、その準備の食材やら、敷き物やら、が入っていたんだよ。

トホホホでしょ？

で、お宅の上司ってどんな感じ？」

近所のおぼちゃんのように結は諸泉に尋ねた。

「私の上司ですか？」

「うん。」

「私の上司、組頭はですね。

私の憧れなんです。」

そういうドンちゃんの目はキラキラしている。

ドンちゃんは上司のこと尊敬してるんだな。

そういう人がいるって、良い事だよな。

「とにかく強くて、クールで、

仕事には無理無駄がなく、的確にこなし、

それでいて・・・お茶目で・・・。

それに・・・組頭は・・・ペラペラ。

クダクダ・・・グダグダ・・・。」

ドンちゃんの顔はキラキラを通り越し、

恋焦がれたような顔になっている。

おい。ドンちゃん。

帰って来い・・・。

なぜに、乙女な眼差しになってるのおおお！

ドンちゃん・・・。

私は少し引く。

「玉に瑕きずなのが、横座りで

『士気が下がるのでそれだけはやめてください』
ついつも進言している。が、あの人は

『個性だ。』と言い切って逃げてしまうんだ。」

完全に私の顔は引きつり、引く。

人の好き嫌いに文句は言わないけど・・・。

どんちゃあくん！どこみてるのお？

ドンちゃんキテルネ・・・。

そういう趣味があったのか。

こういうときはどう声かけたらいい？

・・・だっだめだ。分からん。

とりあえず、話題を変えてみるか。

引きつり笑いを浮かべながら、

私は話題を切り替えてみることにした。

「ねえ、ドンちゃん。」

「ああ。なんだ？」

ドンちゃんが私の方に向き直った。

ドンちゃんがこっちの世界に帰ってきた！

あゝ良かった・・・。

それから、私とシズクさんは他愛のない話をした。
シズクさんはやはり普通の女性ひとではなかった・・・。

まず、よく笑う。

普通、女性は笑うとき口元を隠し、

恥じらいながら口の中を見せないように笑う。

しかし、シズクさんは

「ばっかじゃないの!!!!!!」

ぎゃあははっははっははあっは!!」

と、腹を抱えて、大声上げて笑っていた。

新鮮な感じがした。

そして、石の上で立膝で座る。

「シズクさん。その立膝で座るの止めてください・・・。」

「えゝ。何で？」

「女性なんですから。」

「韓国えゝと室町なら李氏朝鮮か・・・。」

李朝の女の人は立膝でご飯食べるだから!!」

などと、テキトウな理由を挙げて言い訳する。

そんな、ところも可愛いと思ってしまっ自分が出た。

すっ好いてるとかそんなことじゃないですから!

わたしには組頭がいて!!」

座りこんで、頭を振る尊奈門。

(だから、定年まででいいって・・・。)

→上司心の声。

「おやすみ。」

意識が遠のく・・・。

その時間こえたシズクさんの声は
母上の声のように優しく響いた。

「寝た・・・。」

結は立ち上がって、外を見に行った。

「明日には止むかな・・・。」

さて・・・。

食器を片付けて。

本当はそこに流れている川の水で洗いたかったけど、増水しているから、止めとこうっと。」

雨水を溜めてあった鍋を運び、

下の方の水を使いよく洗い、

上っ面の綺麗な水で流す。

そして、手ぬぐいで食器を拭く。

キュツキュツ。

「よし。これでいいっか。」

焚き火の近くに干してあった自分の仕事着の忍び装束を触った。

「おおー！乾いてる。ラッキー。

たたんでしまっところ・・・。」

29 「二期一会。雫（キミ）に出会えて ロ」（後書き）

ちなみにいうと題名のロは日本の音名ハニホヘトのロです。

拙い文章で申し訳ありません!!

同時に読んでいただき、ありがとうございます!

30「二期一会。雫（キミ）に出会えて　フィーネ」

ピチッ ピチッ

チュン チュン

洞穴の一番奥のほうにまで、
オレンジ色の朝日が差しこむ。

「んーん。」

結が布団の中で伸びた。

（ぜまい・・・。）

向きを変え、抱き枕にくっ付いた。

（ん？・・・抱き枕？そんなのあったけ・・・。）

結はねむけ眼をこじ開けた。
まなこ

「!!!!!!!!!!」

思わず、飛び上がって起きあがる。

「なんで、ドンちゃんの顔が!？」

目を開けると、諸泉の顔がアップであった。

それだけじゃない。

結の枕にしていたのは諸泉の腕で、

顔を埋めていたのは諸泉の胸板、

手を回していたのは諸泉の背中だった。

「ぎゃ!!　なんで、これ抱き枕じゃない!!」

（／／／□／／／）

ガバッ

結は顔真っ赤にして起き上がった。

「そうだ思い出した・・・。

私が勝手にあんまり寒いんで、

ドンちゃんの布団の中に勝手に入ったんだった……。
完璧、忘れてた。

……。

自分に言う言葉が見つかりません。

とりあえず、顔を洗ってこようっと。」

洞穴の入り口たって、結は外を見回した。

チュンチュン。

鳥のさえずりが聞こえ、

晴れ渡った大空に朝日が広がっていた。

「晴れてよかった……。うーん。」

あまりの気持ちよさに結は伸びをした。

ボフツ

「グエツ！」

女らしかぬ声が結の口から飛び出た。

「結。こんな所にいたのか!!!」

どこかに連れて行かれたのかと思った……。」

結は正面から声の主に抱きしめられていた。

（ぐるじいい……。）

とりあえず、空気だけは確保しようと

顔だけは離し、正面のそれを見上げた。

「どーいせんせい!!!」

「服も髪の毛のこんなに乱れて!!」

誰だ……。お前をこんなにしたのは……。」

「あの〜。」

「私の結になんてことを……。」

フフフフフツ☆」

（土井先生！

修飾語間違っています！！

私は土井先生のものではありません！

そして、『フフフツ☆』って壊れてます！！コワッ。）

「あの・・・。土井先生？

起きたてですから、

多少着物が乱れていてもしょうがないと思いますが。」

「どの男だ！！

ではなぜ、結の服は

そのような小袖に変わっている？！」

「話せばめんどくさい事になるんですけど・・・。」
面倒くさいことはしたくないと顔前面にだす。

「カクカクシカジカで・・・。」
「・・・という訳なんです。」
ポフッ。

土井先生にまた引き寄せられた。

「結。無事で良かった。」

「はい。私もですから。

助かって、会えてよかったです。」

結はそういいって土井の背中に手を回した。

シュツタツ

黒い影が諸泉の前に降り立った。

「尊奈門の恋も前途多難だな。

あの子のお迎えも来たみたいだし。」

行くか。」

諸泉をひょいっと担ぎ上げた。

「ああ。忘れてた。」

ふところから、手紙をクナイに縛り付け

諸泉を寝かせてあった布団の上に軽く投げた。

「あれ。ドンちゃん。

ここに寝てたはずだったけど・・・。」

結の指の敷かれた敷布に矢文が縛り付けてある
クナイが刺さっていた。

「ん？」

「くない・・・。」

結が手を伸ばすよりも先に土井が手を伸ばし、
何か仕組まれていないか確認すると中を開いた。

「『ウチの部下が世話になった。

今度お礼に伺う

ドンちゃんの組頭より。』

・・・。

結。ドンちゃんって・・・忍びなのか？」

（ゲッ。わざと省いて説明したのに！！）

そう、土井が胃を抑えながら尋ねると、
結が目をきよろきよろさせながら、

「いやゝ。そのゝ。」と答えた。

（凶星だな・・・。）

30「二期一会。雫（キミ）に出会えて　フィーネ」（後書き）

ちなみにいうと題名のフィーネは音楽記号で終わ리と言う意味です。実は日本の楽譜の終わりという意味の記号やら文字やらないかなと探していたのですか、見つかりませんでした。（残念・・・。）だから、ちよつと西洋から引っ張ってきちゃいました。

拙い文章で申し訳ありません！！

同時に読んでいただき、ありがとうございます！

31「二期一会。雫（キミ）に出会えて レセ・ヴィブレ」

たった一晚の話でしたが、
後にも先にも、これが私の初恋でした。

シズクさんのことを組頭に聞くと

「わからないね〜♪」

と口笛を吹きながら目をそらされました。

シズクさんの行方を

タソガレドキ城の情報網を使って

こっそり調べて見ましたが

シズクさんを見つけるとことはありませんでした。

何度か、あの山に行ってみましたが、

聞こえてくるのは

イケイケドンドンという変な掛け声のみ。

最近では

仕事も忙しくなり

思い出すことも

前よりは少なくなりましたが

雨が降るたびに

シズクさんの澄んだ瞳を

思い出している自分がいる

ことは否めません。

諸泉尊奈門

「はあ。」

「昨日から、ため息多いねえ。」

「組頭には関係ないです。」

「私、仮にもお前の上司なんだけど・・・。」

「・・・。」

「シズクちゃんだっけ？色の術使ったんじゃない？」

「シズクさんはそんな女性じゃありません!!」

「しよせんそんなものの癖に・・・。いっちょ前に恋したな・・・。」

三禁破ったな。

いーけないんだ。いけないんだ。先生^{との}にいっちょお。」

「そっそんなことありません!!」

たまたま思い出しただけですから!!

ちょっと気になるだけなんです!!」

「・・・気になってるんじゃない。」

「あ・・・。」

「山本!」

「ハッ。」

「高坂！」

「はっ！」

「そんなもんさ。

しょせんそんなもんなクセして恋したよ！！」

「諸泉です！！」

わあああああ。組頭言わないでくださあいい！！」

31「二期一会。雫（キミ）に出会えて レセ・ヴィブレ」（後書き）

尊奈門にとって、結ちゃんは夢の中の登場人物のような存在です。だって、一晩だけのことだから・・・。

ちなみにいうと題名のレセ・ヴィブレは音楽用語で余韻を残してと言う意味です。

実は日本の楽譜の終わりという意味の記号やら文字やらないかなと探していたのですか、見つかりませんでした。（残念・・・）だから、ちょっと西洋から引っ張ってきちゃいました。

拙い文章で申し訳ありません！！

同時に読んでいただき、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7516s/>

忍者（ふくろう）の学園（しろ）

2011年10月6日11時58分発行